江戸志

自巻之五
至巻之六

ル 4
1553
4

新編江戸志巻之五

東武 懐山子 輯著

小石川

神社略記ニ曰白山権現ハ加賀国石川郡より勧請せし
由へ小石川の名付しと云 北条分限帳にも小石川之名見へ
久しき地名なり 江戸城下ニ小石多き細川流れし
所なれハ小石川と名付けし 此説尤有りけん一の
宗祇廻国記ニ云小石川といふ所に宿りて
ゆふ方を見れハ深き小石川いり川流れて物思ひなれ之

○牛天神社　又云金杉天神　別当泉松山　上野末　龍門寺

略縁記云当社ハ人皇八十二代寿永元年壬辰三月　頼朝公東国征
伐の時小石川の江湖ニ船をうかべて難風をしのぎ給ふ老松
につなぎて暫く和波を待給ふ所ニ夢の内ニ衣冠
麗しき人牛ニ乗て顕れ告給ふ御告有て夢さめ給ふあとを
見給へバ牛ニ似たる磐石也今の牛石是也頼朝公急き
本国ニ帰館有り元暦元年二月当社御建立有り其時菅
公御自作の尊像御長六寸の御正体を当社ニ安置
神鏡御寄附有り星霜を経て紛失す今ニ於て
船つなぎ松のあと　蛎殻坂　網干坂なと申伝へり松ハ

よつて山を泉松山といふ　寺を龍門寺と号す　暦慶
の比入江つゞきて林繁茂せしが土民此辺ニ牛を放して草
をはませしとかや　夫より当社を牛天神と申伝ふ也当社
の牛の絵馬を買受て家内ニ行なへば筆を学て
疱瘡の難をのがるとなり　普く人の知る所也　当社の
獅子　降魔狗は運慶の作として往古ハ禁裏ニ有しを
御城の宝器と有りしを水戸黄門公御所望有て讃州太守
頼常公ニ進ぜられき　其後元禄五壬申年五月讃州太守
当社御造営の節　彼の降魔狗御寄附有しハ　いつの頃よりか
此所ニ狗へ奉進の若[illegible]の事をいのりけれバ[illegible]

ありし当社表裏二華表の額ハ近衛家熈公御筆ニして額字
公当社御建立の砌御寄進ありしとなし
南向岸詰ニ云当社勧請碑銘 延文六辛丑年二月 日と有て
左右ニ梵字三字有り
抑またハ江戸砂子ニハ北条氏康の勧請のよしを記し 若山丹波
守是を修造なりし所記ニ拠て北条家ニ何しと云 東湖和尚
北条家の口談を以て記し 近代誤りて其の因縁をまとく 新ニ
撰し勧化疏の大意なりと記す 予考るニ 江戸砂子説長
談ニより東湖和尚誰人の浮説を信して書しや異説採用
ならん 北条家の口談を仰きこし 北条氏政 小田原にて生害し

息氏直ハ早世し其嫡係ハ絶へ庶流ハ多くして書しく北条家の
記録なとも残らすして失ひ東に若山家文書なり 予ハ多く
遠山家ハ知音なるに家伝ニ此事なけれ 江戸砂子と
て惜なる語もなく不しき社伝をすそ 社撰の伝説を作
まにハ何そやし 然ハ当社勧請の碑文ニ 延文五ニあきハたとへ
北朝の時なれとも氏康の時代より二百八十年余も先の
事なり 是等の語を表を取られさるいふの疑らしくも
当社破壊せしを北条氏康再興せしなるへし 去には此系な
きれすハ兄人東湖の説の誤りたるを知りて当社ハ往古
より鎮坐たる事をわきまへ天満る神の光りハ梅花ニ

知し神垣杉を厳の松も共にうちとのみ
往古ハ社地広かりしを水戸殿御抱屋敷の内となり此地大塚久
保町にて添る所に牛天神の小社あり 此つき寺持也
○牛坂　牛天神うしろの坂を云 此下に牛石あり
牛石ハ此野原に流居せしの頃にあり根入まで深く石のよ
再校江戸砂子に此辺御鷹匠の荒中往昔も しばしここに綱
ちとしたる所と云 此説非也
○綱干坂　伝通院前より上水端へ下る坂也
往古此坂下入江の時此辺多く猟師ありて網を干しけると也
○諏訪神社　小石川諏訪町　むかし思の森と云　此つき寺持

祭神　健御名方命
略縁起に云当社ハ人皇百一代後小松院御宇明徳元年七月牛
天神別当梅本坊 此つき寺 昔の寺号 象観法印の勧請也 象観師ハ
信州諏訪郷の人にして梅本坊後象に従て祝髪し 千ぶ師の
附属を請て当寺を住職し 生国神なる信州諏訪明神
を信仰し年々ノ参詣怠りなかりしか 年七十の秋参詣せんと思ふ
時の霊夢を得て比所のおもひの森の大木の枝に自幣一本
風に従ずして翻くたり 土人奇異の思ひを為し此時後象代川ま
帰り神託の事を語り 土人と力を合せて宮居を営む 降神
の大木 慶長の比なり大風に折れて今はなし 思ひのまくに

満足せしの神託に依て当所をかなかの森といひ伝ふとなし
○金杉稲荷社　小石川金杉　別当永寿山玄性院　真言弥勒寺末
社伝云往古ハ今の安藤家邸の所なりしを当所ニ移す
当寺ハ十七世聖誉法印の時正徳年中六角越前守殿中
興昇基として本社拝殿并ニ寺院共ニ建立なり
○鶯谷　金杉邑の谷をいふ
此地鶯の声他ニ異にして甚佳なり　初音ハ江戸中より早し甚だ
和らかし　ゆへに谷の名となれり
○蟹の窪　鶯渓の上伝通院前大通り組屋敷の
前火之番組の所往昔ハ流下して蟹多く居しゆへ名となれり

今ハ少しき窪みて水たまりあり　次第に芝生し　地下りて鶯渓に至れり
再按江戸砂子ニ昔大なる蟹ありて人を害しかバ石にて蟹を社に祭りしといふ
説あり又可見何がし伝説を以て云ふ説をたたへ也
○三百坂　伝通院の脇也　白山町の先なり
里俗云往古此辺奥州海道なりし時の榎とて今ニ大木の並木伝
通院の寺領となりし今ハ三百坂といひし坂あり　此名を伝ふ
松平大学頭殿正徳享保年中の火消の時の定めより起るよし也
○吹上　松平大学頭殿屋敷　松平播磨守殿の御屋敷也
上なき里俗云古吹上村といふの跡也　松平大学頭殿御屋敷内より
奥州海道の跡とて大木の榎古松ありといへり

○起生野

古老云今のおたんす町の邊より大塚板橋境迄をすべて往古ハむさし野といふ也それより南の方ハ金杉村北ハ吹上迄の原をもつて廣き野なりし

○極楽水

極楽水の井　小石川宗慶寺辺を云樹戸町なと云所なり

極楽水井ハ今松平播磨守殿屋敷の内也元石川山善仁寺の境内也と江戸紛か言ハ大なる誤り也此播磨殿屋敷ハ元宗慶寺の境内なるを昔水戸家より本所ニて代地をとり替たるなり　宗慶寺ハ地内八千坪を替播磨殿の敷となりしまゝ故ニ極楽水も此屋敷の内ニ入て今宗慶寺ニ有る寺の極楽井ハ播磨殿の屋敷よりの呼状也と宗慶寺ニ寺傳あり

了誉上人行状記ニ云應永二十二年二月過武江時七十五得勝地小石川之畔ニ葺草廬而居側有小石井ニ清泉湧漾師呼吉水　旧地在壽經寺之西里余今曰宗慶寺是也　寺前有吉水

○鶴塲　極楽水橋の右の方田中となふ

旧事茗話云元禄比御成の折から御鷹飼の先鶴一羽来りて下りけるを見嘉瑞なりと鈞命有て捕させ玉ふ放し飼ニ在せられる此鶴塲所と早稲田也と二ケ所より外ニ行なりし

日光御殿の居所を言上せし役人なりしは此事にて鶴居けるに於て
場にあらず候御他界後狩も行衛も知られざりけりとなし

○太郎兵衛山　戸崎町の先上の山　江戸掛りて五郎と云山にて
は誤りや

里説に云往昔此所に太郎と云ふ放蕩の乞食ありて穴居し市
店に出ては餅を買ひて食ふ是より此所を太郎山と名付く
とあり　四ツ谷に馬耆仙人と云あり此傳奇に述作の隠者瓢て
傳に書るを新たり此山の上の方は松平伊賀守殿屋敷なり
此地は天文比上杉謙信の家士本庄越前守の陣地の跡なり今も
其縄張の形跡見ゆるとかの家士の説なり

○大坂　戸崎町より下る坂
享保の比までは此坂のむかふに不二見ゆる故富士見坂と云ふを
世木立しげりて不二の見ゆる事なければ

○病人坂　施薬所へ上る坂
公の御恵みにて賤の男賤の女のよるべなきもの病ひのものは施薬
所まで通ひぬるものは人に扶けられ或は杖をつきて病人多く
此坂を往来するゆゑ人の名なり

○施薬所　同所
享保八年小川笙船といへる者施薬所の事を願ひ訴へしより
初て此所に施薬所を設らる小川の子隆好をして施薬所の

御医術を定らる実に於て江府卑賤の者の病疾を救はせらるゝ
誠に仁慈の御代太平の聖政万民仰奉る所也　小川老人ハ
一名館里として常に俳諧を好み廿余年以前より若年より
其伴素堂其角と友とせしより世に称せられたり

○御薬園　同所

白山御殿の旧地なり元禄四年此地に於て御薬園を開き
移されたる也江戸砂子ニ云是誤り元麻布牛尾より
大塚へうつされしと云々

○野中清水　同所にありし　江戸砂子ニ見ゆ

○初音の里

里説云當国の郭公ハ此里より啼初る故の名なりとぞ
江戸砂子云御殿の地の鶯を集めて云郭公の名所なりと云し

○瘡守稲荷社　白山御殿所

大前氏孫子画の瘡守也諸瘡を祈りし團子を土を以て
作りて献じ祈成就すれハ米のだんごを納む

○蓮花寺坂　蓮華寺の脇より御殿跡に上る坂之

○伊賀坂　蓮花寺坂のならび小石川馬場へ下る坂之

○指ヶ谷　小石川馬場の上所

武家之本ニ云寛永比は町並なし木立の残りたる谷町なり
御鷹狩に御成御鷹翔し時あの谷なりと御指ありしより云ふ

所あるとて云傳る也

○白山神社　指谷町　社領三拾石　神主　中井圖書

神社略記云傳部八重垣翁曰白山ノ神ハ伊弉諾尊菊理媛

神　泉守神也是を白山三所とも名所記にありて後水尾院

御宇元和元年加州ノ白山ヲ此所ニ移スト記ス然レ氏此神元白山

ノ地ハ鎮座ハ甚原始久シキ古支ト見エテ神木ニ船繋松とて無

類ノ大木有シ支ハ遠キ都人モ聞傳シトカヤ此所ヘ御社ヲ

移ス時其木ノ根バカリヲ堀出シテ今ノ處ヘ植ヘ後ニ榊ヲ植ヘシヘ

枯木近頃マテ神前ニ存セリ是ホノ事ニ因テ考レハ元和以前ニ

鎮座ナル事訳セリトおもふ

江戸紛子云　旧地ハ白山御殿の地なり　白山社　氷川社　女躰権

現社　三社並びて有し也　御用地と成し時当所に移されし　氷川ハ

西の方に移されき　女躰社ハ何方へ移されしか不知といふと記せり

按るに巣鴨社傳に曰く女体権現ハ久貴稲田姫命にして往古の

社ハ今の小石川御薬園の所に有り　白山女体氷川とて

三社並びて有りしを白山下を所の者ハ女体下と云所有り是

女体権現の有し地白山御殿造営の時白山の社ハ今の指ケ谷

町へ移され此時女体権現・神体二つ有し一ハ絵像にて秋元

四郎宅地に移す　一ハ木像の神体ハ女体なりし頭に大蛇をまとはせ

じき給へる像也故有て宗修通院境内に氷神社と共に祭りて有

△旗櫻　俗ニ八幡太郎義家公の白旗桜と云ハ此桜の本ニ旗を立られしゆゑ然りやいなや詳ならず

桜の一種ニ旗桜といふあり

五葉松　宝永六年鳥居の並木ニ自然ニ生たる人皆奇なりとせしニ其比上様御誕生の事有しとも也其時此松を地ニ移し植替ニ枝葉栄へて今大木となれり 諸人称す

凡其を痛む人有社ニ楊枝を納めて祈れば甚霊験有とぞ

○小石川馬場　此辺往古大江ありしを築立し地ニ草地馬場といふ

○新田村　上手御殿地より駒込へ行町屋有り往昔の幸也是ハ富坂新町の代地まで新田と云

○六角坂　上餌差町より伝通院裏門へ下る坂　高家六角家の中ニ在て下る坂の名と成る

○源三坂　同所より源覚寺の前へ下る坂を云　一名善内坂此坂の名ハ鎌田源三と云し者の宅地有しより名付しとも　昔ハ善内坂とも云ハ坂を上る辺の連枝姫君御殿此所ニ居住の時名付しとぞ

○富坂　向富坂　前富坂とて二段有り　江戸雀ニ云元禄主膳殿(?)の屋敷の辺ニ常ニ鳶多きの巣有し故

こなたのつゞきなる坂といひけるならん今ハ人家立こみて繁りもなし
江戸砂子ニ此説を信用したゝく来歴なとゝ書て
南向茶話ニ云元ハ鶯坂なり元禄比命ありて鶯鳥を放チて
従有し所ニて取て此所の坂の中ニて鶯を放ちし事ハ委く
後世の人よりよりて世俗鶯坂と呼より後ニ富坂と訛る也
難波源ハ武州鶯路茶話ニ云所にて鶯の巣をつかみて鳴きたて
巣をハ法ニふみかけなく鶯坂のたけのしあきらかなる事を志らずして
元禄六年癸酉九月廿七日於駿河岩名部出ハ誠ニ白洲ニ東向
餌差衆より申付向ふ富坂町と改名且麿近町より向ふ
小川町と改号と作出也　是をもて知る証也

○堀左衛門督秀治朝臣宅旧地
或人云小石川水戸殿屋しき二ノ丸より上中下富坂丁の四ヶ所ハ堀左京
太夫殿屋しき境坂上の辺まて一円の大屋しきにて表つき富坂下ニ
有し石垣の形今に残れり　十二五万石の時の屋しきなるとぞ
○二ヶ谷　富坂下の谷也
一名二ヶ谷とつゞきの谷也三ッ谷ハ駒込にあり　四ッ谷ハ　四谷
なれと此谷の一本ニ出す
○稲荷社　下餌差町　別当大聖院
○春日町　水戸殿屋しきの東側町をいふ
春日局の宅ありしより　おのづから町の名となれり

○出世稲荷社　寺町　岩坂下

旧本第記曰当社昔し寺方宅地なりし時鎮守の為に勧請也其後当所小字を出世といふ故当社の神徳を称して出世稲荷とは崇め奉る也

寺院

○無量山寿経寺傳通院　浄土宗　檀林　小石川

宗山酒蓮社了誉上人聖冏和尚　寺領六百石

明徳年中当寺草創

了誉上人行業記云師諱聖冏称了誉号酉蓮社姓源氏常州慈父郡岩瀬城主白吉志摩守義光子也母嘗光字祈岩瀬明神期七日第四夜忽感霊夢而得娠暦応四年辛巳正月二十五日生　中興応永二十七年九月二十七日入寂

本尊阿弥陀　恵心僧都作　学寮百宇程　焼失右三十宇程

塔中　昌林院　所静院　景久院

真珠院　別院　法蔵院　長蓮社

見樹院　瑞真院　門蓮社

△弁天社　表門ヲ入左ノ方　別当　昌林院

△多久蔵稲荷社　別当　喜蓮社

略縁起云　抑当社ハ往昔駒込吉祥寺　和田倉門の内ニ有りし時より彼寺ノ鎮守たりしを　十八檀林所定ありし時当山へ遷し崇め中興

西誉廓山上人住職ニ時学寮ノ内ニ極山ト申所化有リ元和四年午
四月ノ頃廓山主上人を請ふ事有極山和尚同学の僧入学中の事有り
て我ハ是吉祥寺ノ住者也浄土の一宗を明めんとする事を願ふ事久し
幸なる哉当山ハ宗学の檀林なれハ入学させ給ふ事を願ふ所なく明朝出山
すへしと所望を述ル 翌日右の事を語り極山和尚の学寮へ人
一僧来りて掲見得けるを山主へ申さん 廓山上人も夢申しの告の
相合せり 智道兼備の人なれハ彼僧ハ権者なりとて入寺を許
されけり 廓山上人存命の智徳他に勝れ諸人皆尊敬せしこと三十ヶ年
の間学席を勤て有り 今夢ハ我ハ諸ハ稲荷大明神也 登山せし事
我大所願ハ国家安全と学侶の所望を成就せん事を願ふ依て小社

を作りまゐらすへし 永代当山守護神となるへしと示現し 白狐の
形をあらハし 跡ふ則廓山上人役司所化の時持念ふ守本尊十一面
観音 春日作 守護の本地として境内に鎮守也 今に至る迄本
縁起ハ別ニ有之

山八幡社 別当 景久院

社傳曰天正年中一老翁八幡大菩薩の告を夢み翌日ニ至る
八幡大菩薩の石の影をひろひ得けり直ニ勧請し此処を鎮守
と成 別当 景久院ハ富田氏 景久 寄進也 景久元禄十丁丑年
九月六日死 法号景久院殿穏誉可安居士と云

常念佛 真珠院持

加州霊屋　本堂右ノ方奥ニ有リ

新念仏堂　八幡向ノ方

鎮守稲荷社　本堂右ノ方

開山堂　本堂左ノ方

無縁塚

別当　開蓮社

瑞真院

享保六丑年三月四日大火ニ付当山ニ入テ焼死せる人男女凡二百余人也一基の墳となして常念仏有り

無声蛙

開山了誉上人ハ眉間ニ三日月の象有る人ニ三日月上人とよふ上人勤学のさまたけなりとて一山の蛙を封しられしより声を出さす

なりと又或本ニ了誉上人の云 無声蛙ハ蛙の別種にして本草ニ出るとそ然れとも俗世論ずるも尽ぬれ上人の碩懐有情非情ニ及ふれを称して一山の信をふかむるに至れり

○渓照山西向院光岳寺　浄土

寺伝云 開基ハ本山伝通院中興四世感誉存悦大和尚教誉也開山ハ感誉の弟子雲蓮社成誉上人親公應誉大和尚 正保元甲申年建立也 其由来を尋ぬニ 御子母伝通院殿慈容誉光岳智香大禅定尼 菩提所なるを以て成誉信誉相共て心を合せ 公聴ニ達し 幸ヒ四方の地を拝領し両寺となり 光岳智光の尊号を以て寺号とせし 成誉上人ハ承応三甲午年九月十八日

寂嫡亦中興第誉歡了上人就当寺法燈を挑くより不支門資連
綿たり

本尊　恵心僧都作　二脇士　後人作

傳通院殿尊牌　尊霊石牌　境内にあり

観音堂　山の手五番　聖観音　御佛　聖徳太子所作

開山成誉上人慶安年中　奈内の日路白川坊に於て感得

洛納京童べ都の謡に官女常盤寺守本尊とよふ

踊躍地蔵　石佛　万治寛文の頃此尊像時々山内に於て

歓喜の袖をもつて人々踊躍せしところ也

○大栄山廣大院智光寺　浄土　同所

寺傳に云く開山登蓮社誠誉直心上人聞悦大和尚
御当寺傳通院殿御葬送の場の御遺跡なり境内六十間四方中央
御塚松一株あり
寛永十五戊寅年聞悦和尚此地に於て二寺を開基も彼御法号を
分ちて智光寺光安寺両寺をなし御遺跡を守護す故聞悦和尚
を開基始祖とす而二世信誉真存和尚也　不の可にて真存和尚
当寺に住職し長時の勤修懈怠なし自ら弥陀の尊像を造り
佛殿に安置す所も二尺四寸也　前に二十五菩薩を造立し常例
念佛の灵像とす　而右明暦三年真存回向院に移り住す
時其念佛を移しに当寺式法を行ふ取に当寺常例の称す

三千余年也、然るに本山十三世貞誉上人復び当寺金仏を鋳し
元禄四年未十二月十五日鳥居を此堂に回し重ねて本尊金仏を
開闢し玉ふとぞ

○中島山医王院 光円寺　増上寺末

小石川久保町ト云
伝通院のうしろ

元木薬師如来　行基

略縁起ニ曰当寺薬師如来ハ人皇四十五代聖武天皇御宇
天平十三年辛巳行基菩薩関東ニ下向し玉ひて衆生済
度せんとて光紀州遊行摂化へ来り玉ふ社壇を下向し玉ふと
道路に杉の大木一本有り指して曰く父母恩謝の為に仏像を彫
刻せん若我が仏智に叶ひなば此杉我に先だって有縁の地有

至りて祈誓し給ひ果して東に下向し玉ひて此所に草庵を結び
経作し給ひけるに此杉先達て豊島郷の入江に着岸せしに是
薬師如来の示現を得て彼杉の元末を一尺五寸を彫刻し玉ひて一宇
を建立し安置し給ふ今此本尊の薬師是也しかも残杉の木
を以て末世化益ニ為に六体の阿弥陀如来を彫刻し玉ふ是を今に
六阿弥陀と号し衆生尊敬を拝ニ当寺の薬師如来を六阿弥陀元
木の薬師と云ハ六躰彫刻し玉ふ杉の端木にて小身の地蔵尊三体彫
刻し薬師同字に納め玉ふ三体をいつの頃よりか知れざれども今ハ三体
なり猶其菩薩ハ中台随一の文殊菩薩の化身なりと此寺を
中島山と号し薬師如来を現ニ時大光明円ニ行基の草庵を

既ニ廃ス故ニ名付て光円寺と云ふ寺堺故後ニ至りて一千余年出ことに付
通院開山三日月上人此地ニ住し当寺を修造して中
興ありと那ふと云々下略

○梵音山慈照院　禅宗　総寧寺末　同所
開山　自眼慈雲大和尚　寛永八年辛未起立　光円寺隣
本尊十一面観世音　天竺佛師にて三国伝来の尊像也
○東光山賀紋院　真言　三宝院派　極楽水
本尊薬師如来　弘法大師作
享保十六亥年より信州真楽寺先住比丘正等願ニ依て御府内
大災鎮護の為ニ八十八ヶ所永代月並開度行者四峯の宿寺ニ元

○石川山善仁寺　一向宗　同所
開山
○吉水山朝覚院宗慶寺　浄土伝通院末　同所
寺伝曰開山西蓮社了誉上人聖冏大和尚往古ハ伝通院と
云ふ草庵成しが了誉上人下居有しより凡星霜三百五十年
余に及ぶ古跡也境内ニ極楽井有りて往古ハ吉水といへり故に吉水
山と号れ也其後越石少将の御母儀茶阿局此地ニ幽居ありて
逝去ありしゆへに当寺ニ葬りしニ廟所あり
婦女伝云　茶阿局　御方元和七辛酉年六月十三日没法号
朝覚院殿貞誉宗慶大姉於武江逝去寺ニ吉水ト称宗

慶寺〻〻

○寶國山莊嚴院大雲寺　浄土　智恩末　同所
開山 専誉上人順應和尚

○日々山新福寺　一向宗　東　仝
開山

○安閑寺　仝　戸崎町
開山

○遍照山光明院法傳寺　智恩院末　同所
開山 円誉上人

○光國山喜運寺　禪宗　足利長林寺末　仝

開山 源室永高和尚　慶長五庚子年起之

○瑞雲山念速寺　一向宗　東　同所
開山 賢秀

○藥王山能覺寺無量院　智恩院末　仝寺
開山 光誉上人宗呑和尚　慶長年中起之　寺領二十石
寺中　心光院　乃宗院　心身院　長光院

○瑞鳳山淨光院祥雲寺　禪宗吉祥寺末　柳町
開山 大列安充禪師　寺領五石
寺伝云 開基遠山丹波守遠山隼人正也 永祿七甲子年
正月八日総州国府台ニテ里見ト戰 討死也 隼人正法号ハ

日溪正円居士ト云 遠山丹波守ノ室ハ北条上総介ノ息女也
永禄三庚申年卒去当寺ニ葬ル法号
浄光院殿花陰宗順大禅定尼 ト云依テ寺号ヲ浄
光院ト号ス 宝永年中浄光院様御寺号ニ憚リ祥雲
寺ト改ムト云々

寺中 地蔵坊 樽次石碑アリ
酒徳院酔翁樽枕居士 延宝八庚申年五月廿五日 俗名三郎兵衛
南無三宝あまたの樽をのみほして身はあきたるにかへる古さと
先人の道にたかはぬ我もまた死出の山路におもむかんとす 林鹿路

坂下 常福寺 祥雲寺向

初ハ本江三丁目ニ有リ 後小日向ニ移リ 今当所ニ有リ
○天長山 是照院 禅宗 妙心寺末 同所
開山 石隠大和尚
○臨川山 専称寺 厳浄院 浄土宗 伝通院末 指ヶ谷町一丁目
開山
子安地蔵尊 恵心僧都作
寺伝ニ云 昔丹波国東源氏妻女難産の時此地蔵ヘ祈誓を掛
ちゝ安産せしかは丹波の子安地蔵と云
○本松山 蓮華寺 法華 駿州蓮永寺末 同所
開山 安立院日雄上人 天正十五丁亥年起立

塔頭 観成院 仙應院 延寿坊 善行坊 瑞泉坊

鬼子母神 閻魔王 小野篁作 昔河野氏より奉納所也

○佛以山 一音寺 一向宗 西

開基

○幡稲山 清蓮院 浄土寺 浄土傳通院末 同所二丁目

本山八世 頓誉上人 智哲大和尚 本尊阿弥陀 恵心作

寺伝ニ云八幡稲荷を鎮守トす故ニ幡稲山と号ス

海中出現観世音 見送地蔵

○秋葉権現 南無佛ノ御影 弘法作 秋葉同木 出世弁財天 皆当寺ニ安置ス 聖徳太子

○護念山 薬應院 心光寺 浄土無量院末 同所

開山 明誉上人

○南縁山 円泉寺 天台上野末 同所 一丁目横丁

開山 実佛法印 元和六年建立

聖観世音 慈覚大師作 江戸三十三所ノ内

六七ヶ墓所 法名 正徳院 妙栄 天和三年三月廿九日

○廣照山 能満寺 正福院 天台上野末 同所 白山権現裏門前

開山 堅者法印 下秀本

福智満虚空蔵菩 慈覚大師作 永應二年安置

○天祥山 龍雲院 本尊釈迦 鎌倉円覚寺末 同所

開山 楚渓昭沢大和尚 本尊 釈迦

一腹帯観世音　脇立　不動　毘沙門天　釈迦　同作

略縁起云当像ハ妙基栄の作にて元暦之比九郎判官義経都を落奥州へ下向の時此北の方佩分坂にて平産の係にそきざし苦痛甚し山中峠に一つの堂有所乃宗慶是をあはれみ観世音を念じ丹精を尽らし奉祈に忽ち安産有りしとふ是らく義経記に見へたり尤お難産之者此観音の利益を以て安産する事あけて数ふへからず　不動明王　毘沙門天　同木同作

有りしば折ふしで出寺へ安産しするもの之

〇正信山妙傳寺　法華　蓮永寺末　白山　小石川小原町　沢下々殿の先

開山　日禅上人　妙見大菩薩　安置

〇信弘山本念寺　同　品川本光寺末　同所　妙傳寺並

開山　日量上人

一矢場稲荷社　白山御殿地　越鎮守　往昔当社ハ籠放採

御矢場の地に御建立有りしの

海中出現　鬼子母神　安置

〇深広山西巌院浄土寺　浄土　伝通院末　本念寺　向かう

開山　単誉了宅

本尊　恵心僧都作

地蔵尊　小野篁地獄より蘇生の時彫刻するる尊像也

〇性蘭山寂円寺　一向宗　東　同所　浄土寺ノ並

芽基

○梅栄山龍泉寺　天台　上野末　同所　寂圓寺並

芽山

天満天神社

縁起云　武州豊島郡小石川梅栄山龍泉寺天満天神画像一軸
ハ右大将頼朝の臣秋元新八郎政吉随身する處の神也数代肆
專し社て末裔秋元作理亮（元和年中作理亮梅栄山側ニト居ス）家ルに納む傳ふるを
云慶菅丞相自ラ圖之墨代拜する事を得ル嫡子葬去ニつ
父ニ告て曰此像先祖の遺物也豈拜せざらんや尤やとて七日潔斎して
父子拜之忽父子拜皆身慶両眼光を失ふ一旋大ニ怖て是

を祈るため新たニ一社を営梅栄山の境内ニ安置せし享保十六年
五月廿五日粟田安貞てふ者木肌八寸天神像を持来て秘神の
帳外ニ安んし即今前侍ニ天神是也享保五年春人有テ紅梅
一株を霊夢ニ依て植也と云ニ下略

○大映山一行院　浄土　同所

芽山然蓮社本誉上人春貞合営大和尚　天和元酉年三月
廿日寂正観上旨　慈覚大師作

弁財天社　弘法大師作　稲荷社　安置

接するニ小原町て巣鴨に属れ然し白山御殿田地の辺ル
此ハ直ニ白山ニつゞき記せ

○竹林山　多福院　禅　高源院末　金杉　与楽寺より

開山　月窓湛亮和尚

○東光山　西岸寺　浄土　増上寺末　七軒町　牛天神裏へ　光水戸邸北ノ方

開山本蓮社覚誉上人長察和尚　生国相州小田原ノ人

元和四午年起立　延宝三乙卯年正月九日寂

本尊　阿弥陀　恵心僧都作

千手観音　山の手三十三ヶ所　四番目　霊験記

○金剛山　常泉院　真言　弥勒寺末　同所　西岸寺隣り

開山　年久しき故不知　本尊　大日如来

不動尊　弘法大師作　四国八十八ヶ所の移し　八十六番　四土寺よりうつし

○龍頭山　宝珠院　善雄寺　浄土　智恩院末　下餌差町ノ先

開山　深蓮社信誉上人及廓和尚　慶安四年十二月十九日寂

○常光山　源覚寺　同　同所

開山　了蓮社定誉随阿上人　寛永十二亥年九月十日寂

○福田山　乗根院　大善寺　同　小石川　世人丸山とふ　与善寺と云所

開山　巖誉上人

巣鴨　今小石川の内也

風土記ニ云巣鴨郷公穀三百八十二束二乞田假粟百八十二丸四国田出鶴雁雉雲雀羅蔔松桃諸菜等ー

中興治乱記ニ應安元年正月六日芳賀兵衛入道禅可子息伊賀守高貞武州板橋原ニ打出けるハ上杉兵庫頭憲将同兵部少輔能憲大将として千葉介直胤等二千余騎是ハ武州巣鴨ニ陣取よしを記せり

歌まくらニ作者しられ

冬まる太田の原ニ降見えハすかもの下ニ白鷺なる也

撫ちらに 万葉集第十四 伊利麻治能於保屋我波良能伊
波為都良 とよりて 入間川の河原ありしに 然ともかく余分限は
に大谷郷 板橋のならびのはしを 紀せ 尹巣鴨と并て曷ぬに
大谷の原を板橋の近所にて字巣鴨庚申塚の先をいふよ
さらに入間川のおほやか河原を 巣鴨の大谷の原とも別の
所なれん 大谷が原又は大井が原ともいふよし 熟梗秋の葉ども
に 板月大河原武蔵くだる まがをいまひずり えり 景物
に 巣鴨あたりは 巣鴨の地名是より起りて 是の板橋なれや
ば原の子もやあらん 猶考ぬ可し

〇氷川神社

宗慶寺持

社傳云当社ハ人皇五代孝昭天皇御宇鎮座 八幡太郎義家奥
州下向の時参詣のよし 子孫に至て尽上人当社再興有し 社地ハ聖
冏菴をむすびて卜居せ 白山御殿造立の時も 当社ハ往古より
鎮坐のまゝ也 元禄十二己卯年より大社とあがめて 巣鴨の鎮守と定
まれり

風土記曰 氷川神社 神田百束 十字田四囲
人皇五代孝昭天皇諱観松彦香殖稲天皇御宇三年戊辰
所祭 素戔嗚尊 大己貴命 稲田姫命 合三坐也とぞ
社傳と附会を然るを諸書 得りて武蔵一宮氷川神社を以て
風土記に出す処の社とするハ大きに非也 足立郡大宮氷川ハ神社

啓蒙に景行天皇御宇日本武尊勧請のよしを記せり
按ずるに江戸砂子当社は了誉上人当国一宮氷川を勧請して極
楽水の流せをいまむ丑ふの字池とも謂りあへし
風土記に巣鴨御氷川神社と有るは当社往古より鎮守疑
有しあるも八幡太郎義家奉納の社傳有るはまた久しきこと
知るべし

△弁財天社　氷川社地の内
往古氷川社のほとりにありしが近世捜へ白蛇あらはれて常に見し人も
捜ひ侍を弁天望ませ玉ふにこそとて社をこの捜の元に移し建る
より白蛇も見へずとなり

△八幡社　地内
元禄十二年当社はじめて勧請也　氷川社再興の時也
△聖岡庵　本社より右の方
往昔了誉上人卜居に庵室也今は氷川の御供所として社僧住
む聖岡は則了誉上人の名なり
○虎ノ橋　大原町より御駕籠町へ出る四辻の石橋なり
元禄寅年初めて掛を免し虎人称するなれとし
○巣鴨稲荷社　火之番町先小石川蓮華寺持
○天神山　真性寺持
昔は是をも天神山と云茂りたる森有りて天神の小社有りしとの

勧請せし事を知られ

○雷盆山　其形すり鉢に似たり依人名付天神山の南

○庚申塚　巣鴨手枝村の街道にあり此先を大井ヶ原と御茶所とて

○大日堂

庚申塚の向ふ杉えうもりの森に在て行り是ハ寛永の比の御長刀

持何某法印と云人此大日堂を建立して　御位牌を安置し有

今ハ何もなし

○藪村　庚申塚のてまへ大塚の先巣鴨本村也

一名を藪村とハ似こ先食村といふハ宅の名と成れ

○藪村稲荷　藤堂の傍にあり　真性寺持

鎮守の年歴を知らん当所の鎮守にして甚の小社也

○貍(ネコマタ)橋　小石川にある藪村の下の方なり

東向養語に云此地の農民の説に古ハ今より流不そくして

田畑の間を通ひ路とて木の根子を以て橋を渡し故に名也土民ハ

木の根本を根子と唱ふる地也　江戸砂子に云古ハ猫また

出たりとて人を池にさそひしの説　百年前行し此邦

故に然れ

○鍋割坂　猫また橋より上る坂

古のしるしとして巣鴨の往来の者鍋を落し破りたる

より名付しと

○祇園桜　小石川にあり　称にまた桜のあらじ也
里説云この桜ハ木村氏と伝通院の知行定し所也へ南方より
うつしたり江戸城下氷川ハ素盞烏尊ゆへにもしを祇
園桜とはよびしを記れ
○湯坂　松平大学頭殿屋敷前東角組町より下る坂
里説云往古ハ此坂下大河入江にて氷川明神ハ其川を隔てし
杜なりしを隔れ故に此辺の武子此坂にて湯元をすゝりし坂の
名となれりと
按するに風土記云巣鴨川原出之鮎鰻諸鮮芹柴胡香需
等旱水共為之民用と有ハ其辺の所なるべし此坂上をあるいハ
殿町と伝ニ至りてハ北条安房守殿支配の切支丹坂の組屋敷
今ニ其殿の名と其後ハ寛永年中よりの名なるべし
○大塚
里説云太田道灌相国の為に七ケ所に塚を築き狼煙物見の
為なりしをゆへに是を大塚と云ふ又ハ物見塚ともいふ本日向台森川
小石つ殿屋敷内にも大塚とて伝へたり小高き塚有り大塚ハ
太田塚の略と云ひて駒込土井家屋舗内にも大塚有りといへり
本行寺の内にも有りハつまりし七ケ所の内也とぞ
○波切不動　大塚上　本伝寺持
南向茶話云泉国以前ハ今の安藤家の屋敷裏に池有り

雨降んとする時ハ霧立ち出又巣鴨の方より霧立この所まて
翠すならびなき故並霧とよびしなり　又里俗にいふ此所
火災のありしに本尊ハ谷口の川に入て火を除給ひしより浪切
不動尊ともいふなり
○霧山　安藤對馬守殿御下屋敷の森を云
往古ハ此山の麓に常に霧立し故に土民霧山とよびしとぞ

寺院　大塚　巣鴨
○大法山本傳寺　法花駿州蓮永寺末　大塚
読經祖師　寺中　円珠院　妙祥院　通玄院
勝縁起に云当寺宗祖大菩薩の御像は此寺改宗の前より寺
号を善性寺とよびて寺主を瑞鹿禅師といふ元より境内に安置
まつりの不動明王夢中に告て日くここに妙法の滋味を希ふ事久し
願はくハ妙法堂を建立ましまさは当地必す読經の妙音有
りて是験不思議の像を得へしと寺主夢さめて翌日横山秋
元氏の村竜に告り各夢想の趣を語る寺主大に感悟して
禅業をすてて妙宗に入り自ら法仙院日行と改むと依不動尊

の跡なりし地をトせしに忽然として読経の声地中にきこゆ地を掘
らせ数尺掘りて右祖大菩薩の尊像を得より造立ありて成就
して大法山本行寺と改む善性寺の古号を勝地に移して于時
元和年中の事也

○龍宝山高源院　禅宗大中寺末　同所
開山 門解関大和尚　開基榊原氏

○普門山大慈寺　禅宗 東福寺末　同所
開山 王山堤大和尚
開基大慈寺殿仙林栄寿禅尼　慶安四年八月三日死
天珠院様を奉抱夫人也　八十余歳　号刑部卿局

○仏法山西信寺　浄土山石川西岸寺末　同所 大慈寺向側
開山 覚誉上人　寛文二年起立

○長清山善心寺　法花 京本仁寺末　同所 西信寺ノ並
開山 守慶院日栄上人　往古麻布日ヶ窪にあり近宝六年六月当所にうつる

○観光山慈眼院東福寺　真言 東覚寺末　巣鴨本村
寺伝云星霜久しき故開山の名を失へり中興開山良賢法印
永禄五壬戌年寂
本尊十一面観音　御長八寸　立像　恵心僧都作
不動尊　弘法大師作　地蔵尊　恵心作
弘法大師　自作の尊像　皆当寺に安置

○瑠璃山 福蔵寺　同宗 東覚寺末　大塚上町末
開山 説立の年暦なしき焼失之由寺伝なり
鬼子母神　本尊 薬師如来
○医王山東光院 真性寺　同宗 同寺末　巣鴨七丁目
本尊 薬師如来　行基作　聖武帝勅願也　江戸六ヶ所の内
本尊 薬師如来　行基作　唐銅地蔵尊 地蔵坊正元法師建立　第三番目
第三番目也 九品仏元堂寺より所へ配分　閻魔堂　神明社
弁天社　三社権現社　松平加賀守殿より預り

板橋

中仙道の街道筋也 板橋の名ハ往古よりあり 鎌倉大草紙に板
橋の名あり 豊島氏末流此所に住して板橋と称せしより
北条分限帳にも板橋志村を与ふ 上板橋下板橋と分れて宿道
なり

○伽羅稲荷社　板橋
一名 木下藤吉伽羅稲荷とも云 兵本源鎮守の年暦を知られ
弟一ヶ此稲荷へ詣て社傍に君なといひし縁起定かならず
本意ありし跡なり侍りき
○仁王塚　古木ありし松一株ありしと云　同所之内

○源五郎渕
里諺ニ云むかし此所ニ源五郎と云土民川ニ入て死せり其より此川の主と
なりて源五郎渕といふとぞ今ハ其川水かれて小川となりぬ主なと
何へかゆけんしらずなり

○孤雲山 乗蓮寺 浄土 増上寺末 板橋
開山

○丹舟山 東光寺 同 同所
開山

新編江戸志巻之六目録

一 芝 西久保 赤羽根 切通 愛宕下 溜池
一 三田 高縄 二本榎
一 品川 八ツ山 砂水
一 鈴森 荒藺寄 大井池上
一 矢口 古川 大師河原

新編江戸志巻之六

芝

廻國雑記に云 紫の浦といへる所にまかりけるに しほやの煙りうちなびききてもの淋しきに しほ木をはこぶ船を見て

やかぬよりもしほの煙り名にたちて舟にありつむ芝の浦人

南向茶話に云 およそ此海辺を芝浦といふハ海岸をちかき所に木の小枝を並へ立置て海苔の掛りたるを取る木の小枝を俗に芝といふゆへに其名を芝浦とよび来りし所の古老云よし

平維章の不問談に云 江戸斯波を芝と云誤りなり 足利家の管領

に斯波氏何れむかし斯波氏の居住せしにやと書
芝を斯波氏の旧地といふは跡所なき闇推の説なれば信じがたし　文
夫人の説に芝は海苔より出たといへば今を以て古をはかるにいづれかく
けだし海苔の事今のごとくにはなりしや　芝ハ即ち芝生にしてけだし
武蔵野の末にて海にせまりたる野原なるをもて芝のみ生じたるべき
いはれなきにしもあらず　芝生または芝生といへる地名上野にも多く見ゆれば
是等も知るべし　海苔は案ずるに出たるにはあらず
按ずるに不問談の説に依れば斯波家武州に住せしは何事の
旧記に出るや見当らずとの説也　斯波氏の祖尾張守家氏は足利
家より分れたる孫尾州と越前に住せしよりは何事の書にも見えず

林家世将軍家譜にも斯波義敏康親等居住なき事を記せり
又其外の記録にも武州に住せし斯波氏の事かつてなき説也

○神明宮　神領十五石

別当　金剛院
神主　西東刑部
西東中務

神社略記曰按ルニ勢州ニ所皇大神宮ト奉申ハ吾日域宗廟ノ第一天七地五ノ本統也内宮天照皇大神ハ地神五代初大日孁貴ト奉申垂仁天皇廿六年鎮坐在度會郡宇治郷五十鈴川上外宮豊受大神ハ天神七代大初国常立尊雄略天皇二十二年鎮坐在度會郡沼木郷山田原ノ伴部八重垣分羽田丸神明ト奉称御宮ハ勢州皇大神宮ヲ直ニ勧請シ奉ル事有憚テ

御影遷ノ義ニテ奉称となり
伴部ヶ説ニ太神宮を直ニ勧請し奉る事憚有とて内々にて信し
説し伊勢の御神を祭る事も憚る事有て諸国に勧請
奉りて勧請かこそ誠て崇敬の事のあるへし是より出る事を以
またいふ漢の文帝の時趙人親垣平といふものの東北神明之宮
西方神明之墓といへり漢書の法に神明ハ日之に有りといふて
神明とて日をさしていへり天照大神宮を神明と申す事明らけ
き証文なり
当社飯倉神明ハ人皇六十六代一条天皇御宇寛弘弐年九月十六日
新たに託宣アツテ鎮坐ナシ奉ル其後数百年星霜を経て後鳥

羽天皇御宇建久四年鎌倉源将軍頼朝卿下野国那須野へ
狩に向ハれし時一千三百余貫の田を寄附し玉ふ 明應三年北条
早雲し当宮の神領を掠取り神殿大破れ 天正年中関東御行
国の時断絶せるを継ぎ衰たるを起し 当宮ニ神領御寄附有り寛
永十年御信仰ニ依し御修造をかへらる 或人曰昔此所ニ宮倉アリ
其跡に神宮を建られし故ニ飯倉神明と号すといへとし
温泉ある所ハ当社ヲ夕日の神社と書く 石瀧神明を朝日神
社と号し是を以て是に対して夕日の神号成るへし
夕日神社の事心得ずなり 延喜式神名帳下総国葛飾郡ニ
意富比神社有り 卯年ニ意富比と役名有り故心得違へて

名目といへる成べし　そをへ此神社の在所にハ國を印せむとて又此

所名目のをしけるにつきてもと云説し海に向て朝日を云

もあるし　意富比ハオホヒと訓べきを仮名をたがへしもの也

求涼䑓記ニ云　生姜市ハ古へ赤山より此日姜を出し商ひせし故に神ん

祭礼九月十一日より廿一日迄ハ江戸砂子九月拾四日より十六日迄と書いへり

誤り也　又俗に神明の月屋祭といふハ甚だ鄙俚の謬なり　世諺野草

にいふ　俗にいふ江戸の神明の氷河目出井是を洗へバ快よくなる也人

九月中旬人多く集詣する中にも眼病ある者ハ神明の目出井

をみるといへり　を記す也と云々

○日比谷稲荷社

日比谷三丁目　今ハ芝口町にあり　別当

本山方山伏　寂静院

江戸砂子云　万治比年を商人並宿集まる時に稲荷を行き京都

山伏寂静院と云僧山號を森稲荷の小社を持来り一都の

宿をたのみ初め薬中の先行して当所に鎮座ありて

名所記に云　是ハ日比谷三町の氏神として僅の小祠ありける故

定まりたる地もなし町の借宅の跡まで有ければ既に千東新地

に居を定めし宮守に異夢ありて一つの鍵口を得たり此年早

三百余年こともおもしろしかり宮守悦び此由を訴ふ是によ

りて宮居を営みし差置の事しかり

○芝口橋

此橋を日比谷橋といふ橋なれハ新橋と云しが宝永比芝口御門立てし

芝口橋ハ昔ハ日比谷芝口町ヨリ田町ヘ行テ見付今ハなきなし
江戸砂子ニ見ゆ
来海説記ニ云 往古新橋ト云 芝口御門あり 宝永比也弁ず
芝口門ハ享保九年正月九日大火ニ焼失して今ハなし
武花ハふみニ芝口御門ト有ハ元札の辻ニ有し所なり
○源助橋 所の名主の名を以て付しと
○油の井 江戸鹿子ニ源助町ニ有しと出ル 所詳ならず
○露月町
○芝居町 往古此所ニ芝居有し故の名なり
○長南ヶ崎 源助橋流の末海の入口

○宇多川橋 宇田川町大通りにあり
江戸鹿子ニ云 源助橋より三丁目ニ有 古宇田川和泉守と云
人の屋敷の有し依て名付く 又或人云むかし此川ヘ宇多と云
刀を落しぬ人有て是をとらんとて新橋より此橋の下と
なりと云
○新錢座 増上寺裏の海の辺
○三嶋町
江戸砂子ニ云 むかし鎌倉往還の頃 大崎出羽守殿 福島
左衛門殿屋敷の中に而有しに此名付しとなし
○金杉橋 新堀にあり

○金杉神社　今源助あきや敷中ニ内ニあり　金杉十一町の鎮守なり

○封疆跡　将監橋と金杉橋との間片つかた町より通り丁
の間川端

○将監橋　金杉むかしのちなむ
江戸砂子に増上寺表つかの通りなるにん誤也片つかたより
新網とのいふ也

新御府華請之時岡田将監殿奉行ありし其所々未の
世まで伝へて時の人橋の名によびならはし江戸砂子
の将監御名也
橋ハ此説其ニ誤り也寛文江戸図ニ此橋の側ニ岡田将
監殿中屋敷有故将監橋と名付之

○牛の尻　東新網町同朋町より海の方か

○北新網町　金杉橋の下海の方
或人之説中之町といふ町ハ元紅葉讃州屋敷の跡也今ハ
讃岐稲荷の社なり

○雑魚場　芝金杉の浜海の漁師町也

○足柄神社　魚町にあり
和漢三才図会曰大和本紀云昔有猟師其妻臨命終持
授一鏡云若有追慕之情則視此鏡焉仍如故者相其己
妻影猶生年也竜々以其鏡祭為神相其投之為呼当国

新相模ト云々然ルニ当社ハ相州の足柄明神を移す所也鎮守の
来歴なしとおもはれし

○鹿島神社　本生村　別当天台 和光山本地院正福寺

江戸砂子云当社ハ寛永年中ニ一社浪ニ漂泊して来りて此岸
に取上たり又後ニ十一面観音の像も同し所ニ流れよるを見すてゝ
づきて堂の小祠の其所を需るハ常州鹿島の一社也十一面ハ
是鹿島の本地なりに依て此所に勧請すと云
或人云毎年三月十四日十五日の内此海面へ海鹿と云海獣数
百来れり潮汐の刻限にて程経のうちに漁人見物す
常州鹿島よりの神使といひつたへしと云所也とそ

○御穂神社　同所　別当　薪子おなし

江戸砂子云当社ハ文明十二年の鎮守也疱瘡守護神也当氏子ハ七才
未満の内疱瘡せざれば一生其煩ひなしといへり当社より疱瘡除の
守り出ル又神前の岩を拾ひて守りとすとなり
再按ニ人皇九十七代光明天皇の比此地ニ二人の老翁ありて海のつきさ
まる者共の風波の災にあふ事を何ものをみてみをつくしを立て
せられし風波の難を避しむとして此翁みまかりしニ漁人神と
何かなして尉殿の宮とうやまひしニ文明十二年甲午十一月下向の公卿
此社の辺にて馬よりおりて是れ霊神の事なりとてこの神号をあた
へしてみをの明神と崇むべきよしの給ひしより今の神号となれ
り

りしも此前をもし一万里花浜中社て陳社御子やなとおすひ合そ
ての何りと云と

御穂神社ハ三穂津姫を祭るなる之日本紀 神代紀下
一書ニ云く時高皇産霊神勅大物主神汝若以国神ノ為妻吾
猶謂汝有疎心故今以吾女三穂津姫配汝為妻宜領八十万神
永為皇孫奉護乃使還降之 かく見えて又駿河国 三保明神も
此御神なりとし ハ正意か東行紀録ニ記せり
此両社ハ本芝其外七町の産土神ノ祭礼三月十五日両社同日也

西窪辺

○八幡神社 西久保 別当 上野末 八幡山普門院
江戸砂子云 石清水勧請 一条院寛弘年中鎮坐 寛永年中
御建立 毎年八月十五日放生会ありとなし

○城山 西窪 土岐美の守殿中屋敷下
昔熊谷次郎直実城跡のよし 江戸砂子に見ゆ

○熊谷橋 同所 おなし大夫中屋敷の前の石橋をいふ也
按するに熊谷直実子孫ハ其子北条氏康の旗下の士 武州ニ
多く住し直実の子孫北条ニ属せし人の城跡なるへし
江戸砂子続篇ニハ此城山昔麻布殿とやらの出丸也と云々

北条家の盛衰を記も一向になき是なるべし

○番神山　同所　仙石越前守殿中屋敷

昔の一本に云太田道灌の砦ありて此堀山に道灌塚とて
有しが今は此塚山とも無く土取場と成て塚も崩れ昔此所に小堂有り
土佛の鍾馗一尊を安置し往来の人法花を手向し中にも此
豆州玉沢の法花寺の日朗上人の祈念せられし墨絵の番神
一軸持来りて衆人に結縁せ後北条家祈願所をして
社を建立して番神を勧請す則其山を番神山と云ふ道灌の
塚に依て寺をつぶし番神の社を今の新堀に移しけるとぞ
後には京都の法花寺に移せりと旧記にしるし有し

○熊野神社　飯倉三丁目　別当天台上ノ森三集山正覚寺

此神社の神鏡は西三条道遠院殿所持の鏡裏に弐つ有しを
從明の同姓の家に伝へしを故ありて寺に納め其記たしかに有り
養老年中此地に勧請其後此所に移す

○鴈木坂　飯倉町二丁目　擾坂　かわらけ町二丁目

○勝手が原　土器町を下りて赤羽へ出る今広小路なる所也

道灌江戸城を出馬の時に此所にて人数をそろへられし

○土器坂　かわらけ町の坂

江戸砂子に云むかしの渡辺綱三田に有し時此所を過ぐる馬上にて
の引ける馬を見てとゞめたり此馬驄毛にて比ひなき名馬なり

夫より鵆毛坂といふいつの頃よりかかはらけ坂といふ町も土器町と
いふとなん
按するに此説信しかたし
○赤羽橋　新堀にかゝる　増上寺の裏門也　四国町へ行く道
○赤羽川　新堀川の事也　渋谷川の流なり
江戸府中にて京その頃□年に諸人飢ゑに困りて朝三暮四の名を
けしもなかりしに大君の仁政にて今の須助橋より増上寺のこな
たまて新堀を上作り此堀に出て其土田荷一銭のちんを取て
ありしに皆うち眠び終日の助銭をなしぬとあり
○赤羽稲荷社　赤羽橋　別当　真言　延命院

○御被官町　赤羽橋と中の橋との間北方の坂をいふ
切通邊并愛宕下溜池辺
○幸稲荷社　切通坂の上　増上寺に添て隅の所　神主長岡伊豫
近辺十三所の土産神也
○合海山　青松寺うしろの山をいふ
○切通坂　増上寺と青松寺の間の坂也
○時の鐘　切通し　青松寺の山に付ていふ
或人江府時の鐘は石町と本所　吉田町と当所　三ヶ所之といへり
○加藤左馬助旧地　芝切通し　阿部家中やしきの地なり

○愛宕神社　別当　真言　知積院末　円福教寺

神社啓蒙曰愛宕神ハ伊弉冊尊ト軻遇突智命ナリトいへり
当社ハ人皇百八代後陽成天皇御宇慶長八年御鎮坐なりと云々
江戸砂子云昔行基天平十年江州紫香楽に行化せしの月
年ついて勝軍地蔵の像を造り安信内親王に授く即所の
邑中に宝祠を建造し安土に守宮おと名づく是より他に
天正十年夏明智信長を弑逆の時　台旗和泉国堺を發
し去て大和路より宇治を經て江州紫香楽に至て多羅
院四郎右衛門が宅に[illegible]入る此時此像を献ス礎屋右僧部
證宗ハ春音に是を供せられ東に趣き[illegible]其後御軍下に勝軍
の法を春音に傳へしめらる慶長八年癸卯の夏すゑ春音いのちを
て神祠を営構し勝軍の像を安ぜんとす何れの地か可ならんや
去庚子の年関ヶ原役に勝軍地蔵を佩しいつきの地なりとの託答曰
武州梅田村の内葦山なる山あり即ち中川兵部春晴つとめて寺村
として地を鎮め基を開て仮殿を経始せしめ九月に至て功を終て
秋四日に初めて貴賤の観礼を許せり　山下に六院を構ふ　春音の坊ハ
遍照院と号す此寺の円福寺是其の所也其余五院ハ寺の金剛院
普賢院　仙蔵院　華蔵院　鏡照院　寺なり慶長十五年
庚戌　本社　幣殿　拝殿　楼門等を御建立あり
地主稲荷社　荒神社　天王社　各慶長十五年の造立なり

石階七十八階是を男坂といふ右の方に女坂といふ有り 共に本地也
行し　以上江戸砂子

太郎坊社　神社略記云 黒川道祐云 奥の院に所謂太郎坊にて而是
余輒遇愛宕神者也 宜哉当社 火ヲ改メ且産火ヲ忌ふ誠に
故アリト

神明憑談云 神代巻に 兄火酢芹命弟彦火々出見尊の為に
俳優トナラント誓アリ 天狗人トナル兄ニヲワシマス故ニ太郎坊ノ名モアルニヤ
式部太輔正家ノ奉天記ニ曰太郎坊堂ニ大酢芹命也云々
丙辰紀行ニ云 いつごろの時よりか京なる愛宕を此国なる愛宕へ勧請
し来り 駿河国宇津の屋にうつし 又武蔵国に移し作りし

是は将軍地蔵の法行はれて殊に武士の崇敬する人は誰も信力ある
者多かりしを漸つくり広げて大厦となりぬとぞ也

○櫻川　愛宕下　青松寺前の流
江戸砂子に云 むかし桜田は桜木多し 風土記に見へたり 其桜田の
流なれば 櫻川といひしなり いまはその川なし 江府名勝志に従
ふて川をせきとめて大家の中に入るとぞ云し

○新馬場　青松寺の門前より増上寺の裏門前の馬
場なり 是は大名衆の中にて也 享保始比廣小路にあるよし

○佐久間小路　薬師所より増上寺の裏門へ行道也
此所佐久間の中にありし人の名なるよし 江戸砂子にみゆ

西坂云慶長比此小路南角佐久間不閑老横小路西へ三軒目佐
久間日向守殿北側ニ軒目佐久間松千代三軒目西ノ角佐久間
大膳亮殿屋敷まて一町ハ佐久間家五人のやしきありし故の名也

○田村小路

田村家上やしき中なりしゆへの名を以て又小路ともいふ

○藪小路 あたごの下 中の町四辻

江戸砂子云 西南角ニ小ニ藪ありて昔ハ西ノ廉を号して此ニ藪とよ
ひし也 音も大方ニ藪ありしが今ハてつこのとし具まるしのみ
ありしと云ニ

江戸砂子続編ニ 中ノ藪を今の御藪ありて 細川丹州侯竹
を植らるゝによりて藪を御しき鳴へけるを藪小路となりて所の
名のやうになりしと

○烏森稲荷社 アタゴノ下 別当 快長院 神主 山田宮内

神社略記云当社ハ人皇六十一代朱雀天皇御宇天慶年中俵藤太
秀郷平将門為征伐東下向ノ時武州ニ於テ稲荷ニ祈願
せし処ニ白狐白羽の箭を喰へ来りし秀郷ニ与ヘ此矢を以て将門
を速ニ誅ス是ニ依テ稲荷を勧請し奉らんと欲する或夜白
狐来りし告テ云神烏群ル処是霊地也と敬べしニ依テ所々社所ヲ
尋ねしに此桜田ニ一ノ森アリ是謂ハ処ノ霊地なりとて社頭ヲ造立
玉フ蓋ニ烏森トハ神烏群ル処社ヲ建ヘノ号ナルベシト云々

○江戸見坂　松平大和守殿中ニて年の二月昊南坂へ来へ下る
坂也慶長年中芝東禅寺ノ昊南和尚住居ゆへ所故名有り
此坂より江戸中を見しめくの名有り
○昊南坂　溜池の上の坂なり松平大和守殿と山口家
その間の坂なり慶長年中芝東禅寺の昊南和尚住居
なりし所なれはなられ
○潮見坂　昊南坂の下を又東へ下る坂也西窪の方へ出る
西へ下れは溜池の榎坂へ出る也往古は此近辺まて入海ありし故
此名有り
○榎坂　溜池堤より麻布の方へ行坂也大榎一本有り

紫一本ニ云昔浅野左京大夫幸長其へ公命下り此所の水をつき留し
幸長の家臣矢島長雲といふもの奉行して様々の智慧を以て
此水をつき留て後主人公用の序ニ屋しきより榎を所々よせ植
多植たる也今榎坂にあるは枯て三四本ありしと云し
○溜池　赤坂土橋の末也
往古此辺り柳堤とよみし此地の鮒を釣命しられて江州
湖水の鮒を放されし江戸砂子ニ見ゆ
或説ニ云往古は陶山か池といひし寛永江戸図ニ此地は水を
下町辺の水道とせしといへり
○葵の岡　葵坂

溜池より虎御門の方へゆく坂也辻番所の傍十間程の所
を葵の番所と云ふ昔其所に年毎に葵生茂りけるに依て
此名付けりと云ふ

寺院

○愛宕山円福寺　真言　寺領百石　知積院末四ヶ寺之内　愛宕下

開山神證ハ字春音後春昏と改む下野国の人姓ハ塩谷氏
皆川氏也元和三年丁巳豊島郡王子村にして百石の地を山領に充
ル同五年鈞命有て神證に退居を許さる金剛院におゐて
終老すいくほくもなくして円山彭下妻の俊賀和尚に王子俊賀和
尚字ハ円精下野国の人姓ハ越路氏宇都宮保三郎輔綱後
裔也下妻の円福寺に住す　以上江戸砂子にあり

身替不動　円福寺ノ内　鏡照院同所

勝軍地蔵往昔慶長年中武藤常政と云ふ士有り故ありて出家し

哲心法師ハ下総国海上郡を経し時日没に及んで海上に光明あ
り次第に渚に打寄しを見るに不動明王の尊容也哲心歓喜し
取上奉り身を放さず廻国しける或時武蔵国利根川を渡
りしに誤りて海水に落入けるか明王の威徳を以て川下の村へ
打上られ危難を除きぬ其後上野国碓氷峠にて強盗二人
のために殺害に遇んとせし時明王又其難に代り玉ふに依て後に
当所ヘ来り庄鏡庄院の看役所闍梨に附して尊像を
納め奉る元和比故ありて当山に安置し奉る霊験最顕
なる明王の利益多く参詣人多しとぞ

○摩尼珠山真福寺　真言　四ヶ寺の内　寺領百石　同所

開山弘法大師　同末

本尊薬師如来　弘法大師作　江戸名所図会に云武州廿五の山中にて
弘法諸人に仰せ給ふ空海此処に来りて光を見給ひ
其下山の頂に二つの大石有り石におのつから持念仏として尊
像出現して現れ大師をまのあたり所刻し玉ふと
名所記に云建長年中彼英阿闍梨と云者此所に住しを山坂を
たどるあゆみをまなぶも物うく参詣の人も苦労して山上ま
五十余間の麓に七間四面の仏堂を建てかの本尊を移し
奉りしとぞ

○一刀手山青松寺　禅曹洞　江戸愛宕下　記稜寺末之所

開山雲岡𨒺壊大和尚 寺伝云開基太田道灌なりと当寺に
道灌(カン)の像ありと云々
東向茶話に云文明比青松甲斐といふ人雲岡和尚を帰依し
当寺建立す故に青松寺といふ旧地は貝塚なり天正比
此地に移るといふは江戸砂子の説也是もおぼつかなし
移ること青松甲斐といへる当寺知る人なし旧記を失ひしゆへ疑
しくも太田道灌開基して則道灌青松氏に命じて当
寺建立ありしをやさとの事ならん
塔頭 清岸院 寿寿院 傳叟院 吟窓院
忠岸院

○東雲山青龍寺 禅青松寺末 切通西久保内に有
開山
○勝林山金地院 五山僧録 大覚禅師派 寺料七百石 同所
開山 大業大和尚
元来京都南禅寺の金地院の霜寺也当寺境内は元増上
寺の地の内を以て元禄の比当寺の地と成のよし江戸砂子に有
当寺玄実和尚に無執の紅葉一本ありて上台徳公御植付し
ゑ木 真つ赤なる紅葉より大なり
○三縁山廣度院 増上寺 芝檀林 寺領一万五百四十石
人皇百一代後小松院御宇創 開山大蓮社酉誉上人聖聡大

和尚中興開基第十二世 真蓮社源誉上人存意和尚
本尊阿弥陀 恵心作 座像四尺 関東浄土談林総本寺
本堂 東向 横二十間縦三十五間 山門 釈迦文殊普賢十六
羅漢像 経堂 太子堂 開山堂 方丈 釣鐘厚サ尺余
鎮守 熊野三社 飯倉天満宮 天神宮 今是ヲ俗カヤノ天神ト云フハ誤り也 カヤノ天神ハ山下
松林院寺内ニアリ 別当 幸松院
安国殿 四月十七日 諸人参詣ヲ許シ拝セしむ 別当 安立院
黒本尊堂 毎月十七日 開帳有 大寺家番頭持 別当 良雄院
安西與堂 不断念仏 本尊阿弥陀 別当 常照院
御仏殿 十四日 真乗院 同廿四日 瑞蓮院

同廿日 同 崇源院殿 宝勝院 桂昌院殿 仏心院
清陽院殿 通玄院 浄徳院殿 学蓮社 昊仙院殿 松蓮社
明信院殿 鑑蓮社 至信院殿 鑑蓮社 山下出世弁天 別当 宝珠院
同閻魔堂 別当 仝 同秋葉権現 別当 福聚院 三鎮守社 別当 通玄院
子聖権現 別当 清林院 鍬形観音 別当 恭敬院 往古土中ヨリ鍬ヲ以テ掘出ス故也
不断念仏 別当 聖衆庵 大黒天 別当 貞松院 弁天島 源流院
往古ハ田原大善寺ト号ス中比ニ此所ヘ開帳の為下向有リ夫ヨリ当寺ニ安置有リ 出世不動 覚範作 別当 慶度院
妙定院 二百俵 妙誉大僧正退院の処也 明和七寅年 設之 堂六間四面 戒壇作
再叙、性寿菴 方丈後の方ニ有 堂之後ニ薩摩守ト云 長州清
傾城玉松ト薩摩守忠吉君の御位牌有り 御法名 性高院殿

ト云ス故サツマ寺といふ

極楽橋 山門右ノ方　鷹御門 極楽橋の処　蓮池 本堂の後

柳の井 本堂北頭塔の邑ゝ 桜 本日阿弥陀仏殿前　曼陀羅石 阿弥陀所 修繕彫工人

円座の松 山下谷ノ辺　円山 山下谷ノ西　産千代稲荷社 観智院

大滝地蔵 花岳院　五重塔

著実異変ニ云 増上寺住侶某上人目を病みて隠居せら

行ける夜深ふ及んで和尚の名を呼ぶ誰ぞとこたふ我は此寺の数

隣の地をさる四方経りまいへ稲荷の祠を建べしと云安くて夢さめて

中をきけるも其かたちを作りて然らは代りに何かうるへし

望係ると云和尚外に望有し聖経を見るにうけまし目を守て

守ふべしや然らば祠を造立し望に随て奉らんと云へも甚だ悦び

則此文をかの前にさし置てくれ其寄して其和尚

燈をともし見るに目の明うかる事なりけるに其後此文に

産千代りけるの望に地に祠を建て産千代稲荷と号

するよし

○所化寮 三島谷 天神谷 南 中谷 同 中谷 北谷 神明谷 南新谷 同中谷 山下谷 同 北谷 同 中谷 袋谷 同 西谷 三軒谷

○常念仏 五百石 別当 恵照院

○一文字席 五十僧 此内学頭二臈より十二僧は一山大衆の月番

役執行すゆへ上坐十二僧を月行事といふ

○横木間席 三十八僧　縁ヶ輪席 六十二僧

九大衆　三千余

芳野天満天神社　増上寺中　松林院

慶長五年六月廿四日住持嚴誉守公夢ニ童子来て告曰是より
南の松樹の本ニ天満宮鎮坐し玉ふ拝詣し恭敬すへしと
則守公夢さめて松の本ニ光明を尋求て御長三寸三分の本像
を得て濱ニ安置し則六月廿四日当社の御みやとなし奉りぬ

塔頭　三十坊　各御朱印アリ

源流院　威徳院　雲晴院　天光院　月界院
昌泉院　貞松院　良憶院　光岳院　月窓院
良雄院　源宝院　源壽院　花養院　池徳院
廣度院　常照院　源真院　花岳院　浄蓮院
安養院　天陽院　観智院　常行院　徳永院
瑞善院　瑞花院　清光院　北岑院　林松院
心光院　常念仏　千体堂　観音堂　薬師堂

西枝ニ心光院宝暦年中芝新堀へうつさる　元禄七年
或三十五世念蓮社貞誉上人より相続て代々大僧正なり

開山　西誉上人

千葉系図云西誉上人於下総国千葉貞胤弐年六月十三日生父千
葉介平氏胤童名徳寿丸於真言武州貝塚村光明寺住役
為浄土宗了誉弟子永享十二年七月十八日亡歳七十九丗新田義貞八

第一世ハ明蓮社聰誉上人酉仰和尚と号ス 楮場法源寺開山なり
二世ハ音誉上人なり江戸甲賀の人望月外記ノ子也宝徳元年
三月寺主となる太田道灌と交り甚厚し
当山むかしハ貝塚にありしを光明寺といひしを慶長の初芝に移せる
中興開山源誉上人武州由木の人 父ハ由木左エ門源利重也 天文十三年
三年正月生れ 片山宝昌寺にて出家す 天正十七年八月縁山雲
誉上人に継て第十二世の寺主となる 翌十八年御駕をむかへ奉り
永く御菩提所となる 慶長十二年常紫衣勅許寺の綸旨を賜ふ
同十五年七月十九日普光観智国師の号を賜ふ 元和二年十一月
二日寂 時に七十七

十三世正誉上人廓山和尚ハ甲州の人 父ハ高坂弾正之
両枝と云 由木ハ武州七党の内西党也 姓ハ日奉 宗頼内舎人
宗頼長子宗忠西党祖也 日太夫と号し茲に源利重に至りてハ
日奉利重也
○光明山和光院天徳寺　知恩院末 寺領五十石　西久保
人皇百六代後奈良院天文二年草創　智恩院宿寺也 天徳庵
と号ス 開山三蓮社緑誉上人 中興第十三世見誉上人
寺中　栄寿院　摂取院　不断院　光安院　浄桂院
宝珠院　栄立院　教受院　栄関院　智相院
瑞巌院　智学院　和合院　長元院　長存院

浄品院

○櫻田山光円寺　幸龍寺末　同所 切通の上

開基

○真珠山光宝寺　禅 青龍寺末　雉子町 切通上ル

開山

○梅上山光明寺　西本願寺末　西久保

開山

○摂取山専光寺　東末　同所 光明寺トナリ

当寺元溜池今ノ南坂の上ニ有 明暦比当所ニうつる

○西谷山寿命院大養寺　知恩末　寺領五十石　同所 専光寺筋向ノ

開山 儀誉上人 慶長年中起立　寺中 寿命院

○廣栄山一乗寺　法花 誕生寺末　同所 飯倉町

開山 摘大僧都日達上人

○妙光山真浄寺　同 本土寺末　同所

開山 常在院日明上人

○長運寺　同所

開山

○天徳寺隠居所　飯倉町三丁目横町

○善長寺　土器町

○金竜山瑠璃光寺　禅 青松寺末　飯倉町三丁目

○飯倉山順了寺　浄土　増上寺末　飯倉三丁目
開山
○向陽寺　東本願寺末　金杉
○存明寺　〃　〃
○徳応寺　〃　〃
○常瑞寺　〃　〃
○法円寺　〃　裏町三丁目
○勧勝寺　〃　法円寺ト隣
○南江山経覚寺　西本願寺末　金杉　勧勝寺前向
○安楽寺　〃　〃　経覚寺ト隣

○松流山正伝寺　法花　中山法花経寺末　同所安楽寺隣
開山日親上人　毘沙門天　伝教大師作
○徳聚山円珠寺　同　寺近末　同所　正伝寺横町
開山　日通上人
○松林山安楽寺　西本願寺末　同所　西応寺前
開基　寺中　浄円寺
○了善寺　東本願寺末　同所
○孝救寺　金杉四丁目横町
○田中山相福院西応寺　浄土　増上寺末　寺紀十花　本堂
名所記云　当寺ハ慶安三年戊申仲秋比明賢上人初テ開基

と云事也 開山明誉上人ハ慶長五年黄鐘十日ニ遷化八十六歳ト云々

江戸砂子ニ云 朝日の松 寺ニ植松 火除の松 何れも境内にあり

塔頭 定林院 善受院 正定院

○光明山法泉寺　李本行寺末　同所西應寺ト有

開基

○演暢山観光院法音寺　浄土知恩末　同所平林寺之三月

開山

○和光山本立院正福寺　天台 廣島別当　横新町 又同町

開山

○正念寺　同町 寺之三月 横町 法音寺ノ向

○瑠璃山宗光寺　浄土知恩院末　同所芝下町

開山

○、、栄門寺　法花池上末　同所芝下町

開山

○紫雲山源光寺　浄土知恩院末　同所サツマノ向

開山 經蓮社曲誉上人

○影向山西信寺　浄土増上寺末　同所寺之三月

開山

○長徳寺　西本行寺末　同所西信寺ナラビ

○海見山智福寺　浄土知恩院末　田町六丁

芝山

○十劫山天樹院成覚寺　浄知恩院末　田町八丁目

芝山真誉上人廣誉如然和尚

三田　伊皿子　高輪　二本榎

源順和名類聚鈔ニ荏原郡御田ニ作リ北条家旧記ニも
三田ニ作リ風土記御田郷公穀三百六十七束假粟三百十九丸
貢松竹蕨等ヲ有諸倉番充大膳或木工寮

○窪三田八幡神社　窪三田　田町八幡の持

江戸砂子ニ云田町八幡の旧地也小祠作例の石塔ありし小祠の
中ニ相殿のやうにして有リ青き石ニ蓮花彫りて年号ハなけれと
時代ふるきと云リ至て古風なるもの年号も月日も見えずとあり

○三田八幡神社　田町七丁目　別当　眺海山無量院

社傳云当社ハ人皇六十六代一条院御宇寛弘年中の草創

本地の藤堀傳教大師の作綱ヶ守本尊也とあり
江戸砂子ニ云 石清水ニ同社也むかしハ窪三田ニあり人皇百十代
後光明院御宇正保年中当所ニ鎮守と云 神体ハ綱ヶ守護の
神といへり田町九丁目ニあり十三町の鎮守祭礼八月十五日隔年也とあり
按ニ当社も則風土記ニ出處の稗田八幡成也 ○江戸砂子ニハ
風土記を引て当社のよしろ稗田始也——と書しハ沾涼が説無ら

一ゝ——

風土記曰 荏原郡御田郷 御田或冥多
稗田八幡 圭田五十八束 三字田
所祭應神天皇 武内宿祢 荒木田襲津彦等也

和銅二年己酉八月十五日始行神禮

○渡辺綱旧蹟

続江戸砂子ニ云 三田会津の太守の下屋敷の地ニ鵜峯先生の
箕田園の記を見て里人の虚談をしりぬるを知る 彼記の略ニいはく
武州荏原郡治谷荏箕田邑ニ源綱の陳蹟也 綱老て仕を辞し
此所ニ移て而口志すしかるにこのうたに叔母の是奇れを錦をいへるし千塚
於此所塚の上ニ松を栽て遺跡を表す 則是壮気又また散せさる
千歳の余情あるもの乎 明暦四戊戌の夏会津源公此地を玉ひ別
荘としまつり於其塚を存す 蓋し其勇を知り古の士を賞し給ふ
乎と云ゝ

故ありて綱が生まれし地或は綱事跡ある所なりといふは誤りなり 治源
箕田園池を見て鵜峯先生の書かれたるは実とおもふは誤りなり
鵜峯先生は望に任せて此池を見たれども何ぞ虚実を正し、
及ばんや此地に此池を望みしも古今なく綱が事跡をば
所をあらはして里諺によりて古説を用ひられしは又あやまり
然るに又旧記によりて古蹟を考ふるに此地は則三田家の旧
領にして代々此所に住し三田家譜を按ずるに三田の何某其子縣所
守綱謗武蔵三田に住し夫より代々綱の字を以て名とせり依て
人渡辺綱と誤りて成へし 江戸砂子に書処の箕田三田八幡に
綱の石碑ありと年号もなく其時代も知れずと云々とあり是を

以て考ふべし 此石碑は後に当一堂の碑成るべし 渡辺系図に曰く
源次充被配武蔵国足立郡箕田郷大力而有武勇誉於其
居地祝納於箕田八幡宮とあり 綱の出生の地は足立郡の箕田に
して代々是に住せり [illegible] 其原公卿の末葉箕田の鴻巣
より熊谷へ三里半の間に阿部豊後守殿領内箕田村の中に
八幡あり是渡辺の綱が社也綱は祖父より以来箕田に住し故箕
田源次と号せしを [illegible] 第一とせし本首姓を東武へ移り新に氏姓
箕田の渡辺を [illegible] 時箕田に於て綱を祭りて子八幡へ寄附せし其以
先に諏訪の社あり是も綱が [illegible] して [illegible] 社あり
と其所の翁語りし如是等の [illegible] を以て考ふるに綱が事跡も足立

郎の箕田なる事疑ひなかるべしと云

○半月池　綱か塚のほとりに有る池なり江戸砂子には綱が
産湯の池とあれど是非なかるべし

○懐古松　綱塚の上に載りたるの松也鵝峯先生の銘せられし

○渡辺坂　有馬家と松平隠岐守中屋敷の間の坂をいふ

○綱坂　松平主殿頭と保科家との間なる坂をいふよし

○小山神明社　三田　飯倉神明の旧地なりし山上に社有り

○四国町　三田町之内
或人説云今の蜂須賀家と有馬と松山との三国中屋敷有る故なりと
跡は今同朋町より南の方三田二丁目の裏なり

○碁打屋敷

○伯耆殿原

○春日神社　三田一町目　別当　三笠山神宮寺
和名三笠山同社
神社略記曰春日社は人皇四十八代称徳天皇の御宇神護景雲二
年の鎮座也とあり江戸砂子に云当社は人皇六十二代村上帝天徳年
中武蔵国司藤原正房卿任国之内藤原氏の宗廟たりとし
此所に勧請有り其後人皇百四代後土御門帝文明の比法印慶
賢中興せし本地十一面観音は弘法大師の作にして慶賢瑞夢によりて
請ふ所の霊仏也　三田の鎮守祭日九月九日なり

○三田の墓　六孫王経基東夷征伐の時出城の跡地とせられし
より前ゟ手絶になりし　江戸砂子に出たり

○三田川　墓より流て新堀に入る也

○潮見坂　聖坂の西の方墓へ上る坂也と江戸砂子続篇に
有り或説に云三田功運寺の脇より三田中寺町へ行所の坂也

○聖坂　三田町より墓へ上る坂をいふ
紫一本に云三田三丁目より三本榎の通功運寺と云寺の上の
坂をいふ　江戸麻布にて云むかし高野聖の宿ありし故聖坂
と名付しと

○元札の辻　田町五丁目の三辻をむかし此所に高札場あり今は
芝口に有し往古此所に芝口御門有り此御門は越後守忠輝卿の御門なりし
善尽し美尽したる故　御門をくらぶ信長へ左近の陣の所へ此御
門を移して芝口御門とはなりし　武家栄枯録に見ゆ

○亀塚　土岐家の屋敷の内に有り
続江戸砂子云元は済海寺に有り昔土岐家より地面を望まれし境内
ありしに依て今土岐家の中に有る内に亀塚は有し済海寺の山号
むかしは亀塚山と云ひしより古老の云むかし晴天なる時は小亀多
く塚より出しと或人云常に亀出たりと実なりや否以て其ことを知らず
その印

○伊皿子　町の上二本榎の西なり

○念無横町　俗ニ根芋横町といふ
或人云牛町札の辻牛屋の間の細道より正面ニ通往寺といふ浄土
寺有り此門前より伊皿子の方へ横ニ出る所をいふ也念無といふ道
心者居りしといふ若く済海寺の開山念無和尚の遺跡ありて是也
○月の岬　伊皿子の丹　江戸砂子ニ東都紀行を引て
秋ちかき月の岬やいうなのん　名を夏山のしげみのして
○高輪
上ミ下ハ品川まで片側町にて東ハ海也
北条盛衰記云大永四甲申年正月十三日上杉修理大夫朝興品川へ
打出ル由自余の先陣ニて高縄原ニて戦北条氏綱後陣岳沼谷へ
廻りて前後より攻上杉朝興敗北　大永ヨシテ記入
○牛屋
或人説云上高輪車町ニ往古来より六軒有て皆近江大津の者なり
是を駿府へ召されを其後御入國の時江府へ召されて之此地拝領や
しき也仙波太郎兵衛　田中吉左衛門　山口勘兵衛と云人なり
牛数四百有余之日本橋四日市ニ牛置場の地拝領也今も
ち代朝より出てこゝに来る也
○二本榎
続江戸砂子云むかしよりありしつかあり左右ニ小山のごとき塚二つ
有り上ニ十尋にあまる大木の榎二株あり往古の一里塚なりし

云伝へたり此橋ハ三十年やむかしの図録に所見ならる其頃し切なら
き今ハ上高輪つゝき町なと成て其前とおなしく此元の橋ありし所の
名なり当所ハ下高輪の内也下高輪ハ牛町より品川までの
海辺此辺を云上高輪ハ田町九丁目の裏をいふ也

○但馬横町

二本榎より高輪の庚申堂の前へ出る小路をいふ行当りは松平
但馬守殿下やしきあれハ俗にいふ也

⦶鬘坂

但馬横町より下る坂也私の名也昔或る出家かつらをかけて遊行
此所此坂にて頓死せしより俗に名付と或人の説也

○洞村　俗にほらといふ

二本榎の信州高遠侯の下やしきの前より高輪東禅寺と
安泰寺の裏へ出る道の名也昔螺の出しより名付といふ也

⦶有寿喜（うきス）の森　下ニ稲荷社ありかつら坂の下なる本多
丹後侯下やしきの内にありと或人の説也
鏡江戸砂子に云下高輪松平土佐侯の中やしきに町人山口御用
なりしものの鏡に大木の松ありしか遅し田孫に此木色ひとつその幹
少しまに於きまりし又里説にむかし此所に大木の榎一本有
此木に鵲栖をそむ其真楼をかもり夜に入ては白銀のハクチ
以て多くみたるが如く光る依て鵲樹巣とも書といへりうきすの

八幡行

○高山稲荷社　下高輪 シヤモジヨコ丁　天台　安泰寺兼帯

○釈城大明神社　同所　禅　長泥寺持 ちく菜寺持

○稲荷社　上高輪　別当　大宝院

寺院并寺中之神社

○三木山春林寺　浄土　大椙寺末　下寺町 三田四丁目 横 三田ト云

開山　虚吹　弥陀　春日作

○栄松山長運寺　法花　身延末　同所 横 三田

開山

○　西蓮寺　一向宗　東末　同所

開基

○黄鵠山大松寺　浄土　増上寺末　同所 さくやしき寺

開山　元相州中原ニ有 寛永の頃此地ニ移ルよし

○藤沢山西蔵院　天台　上野末　同所

开山
〇大元山長延寺　真言　護持院末　同所

开山
〇竜渕山宝生院　仝　円福寺末　同所

开山
〇　大聖院　仝　真福寺末　同所

开山
〇歓喜山佛乗寺院　真言　真福寺末　同所

开山
旭弁才天

社傳云往古弘法大師近江國竹生嶋にこもり給ひ行ひ給ふに感得
の尊像なりとて手つから彫刻し給ふ像也元禄の比吉永村某といふ
者竹生嶋弁天を信仰しける年何りけり当寺住良運法印に謂し
弁天の尊像を弁金光明最勝王経を請奉りしを当寺の山号を
あらためて竹生嶋某を改名して又面迎に信心のあつき年の頃
月半を経て近江の国にいたり参籠して傍の夢に勢州二見浦
より海中より弁才天を感得して夏足にて忌をれ
を信心して奉祀目をしらせ給ふ此等の人の信立像の天女を負ひ来り
竜宮に帰りて曰汝年来信するところの尊像をさつけ奉る此尊像
は弘法大師竹生嶋にて彫刻しあひて其姿を刻し給ふ弁才天

汐鎮ニ之浦ヲ相せし　号除是之字地にあらすとして告り故
其後ありて旭赤方天と称す　此当寺ニ安置す
○外長山　幸福寺　天台　上野末　同所
開山　権大僧都　長慶法印
○　願海寺　浄土　増上寺末　中寺町谷　幸福寺上ノ所
開山
○普門山　慈眼寺　禅　天沢寺末　同所
開山　玉翁轉大和尚
○廓然山　林泉寺　浄土　増上寺末　下寺町
開山　玉蓮社道誉上人

○伍大山　明王院　真言　護持院末　中寺町
開山
○宝島山　大信寺　浄土　知恩末　上高輪　中道寺向
開山　称誉上人
○法呑山　正泉寺　仝　増上寺末　同所　中通り
開山　乗誉上人
○佛日山　東禅寺　禅宗　妙心寺末　江戸三ケ寺ノ内　同所
開山　霊南大和尚　法鑑禅師　守永肥前守　祐良五男也
寛永廿年癸未七月廿七日遷化　六十二　当寺昔ハ麻布　基とありし寛
永年中此地ニ移ル也

塔頭　松壽院　宗渤院　心源院

或人説云海上禪林額ハ昔朝鮮人来聘の時此額を望みけ
れハ府内の入れるきハ請て書人ベンドテ場所の此十二年目ニ十二枚
書て送る一年ニ一枚つゝ書しとぞ此十二枚の内一枚掛替て残り
ハ庫蔵へしまひ置き内より一枚掲出して是を留め額ハ取りはづして
残りハ朝鮮国へ陥れしを彼国の者写しニ十二年目ニ書て在を
額ニ留たり世ニ日本の方を筆者ぬ感じけるとぞ覚明の比
書き筆しとぞ朝鮮人の筆也

○　心海寺　一向宗　東末　田町

開基

○金鍔山　隨應寺　同　知恩末　中寺町

開山　撰誉上人

○月照山　称讃寺　同　増上寺末　同所

開山　大蓮社西誉上人聖憁大和尚

○寿命山　長松寺　同　下寺町

開山　傳誉智雲上人　茶壺観音

寛永年中の末肥前国浙の眼の浦太郎兵衛と云漁人網(アミ)にて
大なる茶壺を上て内ニ御長五寸余りの正観音と丸き鏡有り
筑後国柳川の刀鍛冶中池惣左エ門ニ観世音を信仰て或る夜
不思議の告を得て肥前国へ到り太郎兵衛ニ乞ふて像を乞て帰る

そこぶ二男二良六三つて仏くよきむ七十こかたむきて中気の病て伏しけ十一
月十七この夜観音の告をうけむ尼茶を若保ことしけ尼を
の毎こ病平愈しけり兵保福禄寿の鏡茶壺なりて良なりつ
当寺ニ納むる茶壺ニ四字八句の銘有　一天世界　四海太平
國土安全　萬民豊楽　天尊七宝　福禄寿鏡　竜神納受
心願満足　当寺十世一誉上人の時よりも延享五辰年也

○雲晴山貞林寺　浄土　増上寺末　中寺所
開山　馬郎婦観音　唐仏　安置

○醫王山妙嚴寺　天台　上野末　同所　上野山下　ハヒ丁
開山　護法童子　安置

○法具山多門寺　同　同　同所
開山　擁大僧都祐春法印
聖天社　浅草金竜山聖天ノ同月同日同作にて

○虎嶽山常林寺　禅　下総大隆寺末　同所
開山

○桃源山仙翁寺　同　吉祥寺末　同所　常林寺となり
開山　用山照和尚

○玉鳳寺　同　常林寺末　同所
開山　格山照和尚

○高峯山南臺寺　同　上寺　真如寺末　同所

開山 高國禪師

○朝光山 真藏院 真言 喜福寺末 同所

開山 典宥和尚

○竜谷山 功運寺 禪宗 三州龍門寺末 聖坂

開山 默室天誾和尚 二世天叟慶存和尚 開基

寺中 大林院 明円院 兼福院 所化寮

○光秀山 蓮乗寺 法花 小湊末 聖坂下

開山

○池宝山 大増寺 浄土 増上寺末 高輪臺町 実相寺より

開山

○周光山 濟海寺 同 知恩末 臺町 大増寺向 土取場より

開山 法誉上人念無和尚

菅原孝標の女更科日記 むらさきの、おふときく野も、芦荻のみたかくおひて、馬にのりて弓もたる末へ見へぬまて、たかく生ひ茂りて中をわけゆくに、たけしはといふ寺有り、はるかにいくはゐといふ所のろうのあとのいしすゑなとありけるをゆかしかりて、いかにそけりき 略之

按するに更科日記にあみの記を昔武蔵のたけしはといふ所の人火たき屋の衛士となりて登りけるか帝の家女おひまゐりて古郷に帰りけるに姫にむかしの家ハ此田町辺にて宮の家を内裏

のみく作りて住せられける其ハ世を去りけるも寺となり　おいてを
竹ノ堂寺と云也其の妻のうみ給ひける子供ハ世のてむきしを不
好たるしてなむ　有りける其後ハ老僧の世の時此寺を右
星霜を経　ちまたハいろいろとちゝまり也
目黒の涼花　四十八足余沖より此境内を目前として　入
津をも此墓より安房上総　眼下にあれて　佳景の地なり　当寺
三八景有りと江戸砂子にみえ申

○平田山正覚院　禅宗　總持寺末　基所中寺町横丁
開山快翁和尚

○常教寺　一向宗　西本　仝所

開基
○荘厳寺　同　東末　同所

開基
○滝高山玉泉寺　天台　上野末　上高輪
当寺より小児の北条を守れ

開山
○神足寺　一向宗　東末　基町
開基　行心法師

○梅岩山正山寺　禅宗　青松寺末　仝
開山　一峯麟曹大和尚

○妙荘山薬王寺　法花　小湊末　仝月こ寺

開山
○　泉福院　同所

開山
○三田山淨榮寺　淨土　智恩末　同所

開山　法誉上人

魚藍觀音

当寺のもと唐仏なり開山法誉上人回国の時夢想のつげ
にて長崎の辺土にてもとめ来りしなり貞享年中より
開帳ありて秘仏にし拜むなりと江戸砂子に及ひ
江戸砂子に魚藍寺とあるは誤りなり

魚藍觀音　御長六寸有余　三田山魚藍寺

寺伝に唐元和元年金沙灘といふ所に一人の美女藍をさげ
魚をひさぐなりしが其容の得がたきを慕ひて女のもとへ多く
性得ならずなく若者のうちにも仕へんと云ふものありしが
中に馬氏なるものより是をよく此依て此女をめとる迎へ絶
きいあへなく此世の外となりぬ馬氏一のみとなりそのことを
たづねて日を経ずいくほども大僧来りて馬氏と共に塚をひらき
見れば黄金の骨金鎖なりて光を放つ是より其霊
をまつりて三宝となせんといふこれはじめの金沙灘に応化ありし
好相をなして魚藍の観音なり当開山称誉上人の

妙法尼大肥後を嘆きて 霊夢の告によりて彦坂氏を附し

元和三丁巳年豊前国中津と云所に精舎をいとなみ魚籃

院と号けしを移されし又是をおこなりて山を築き海を望みし地に

寛永七年庚午武州三田の傍に一宇を建立ありしを妙法尼の霊

當寺開山称誉上人其地の有せまきをなげきし承應元年壬辰今の

地に移し当寺を建立して三田山魚籃寺と号けられしとなし

○

開基

徳玄寺　一向宗　東末　上高輪 三田代地町 宝徳寺より

○

開基

宗清寺　同　西末　同所　同

○日照山宝徳寺　同　西末　同所

開基

○鷲峯山中道寺　天台　上野末　同所

開山

閻魔堂　地蔵堂

右地蔵尊は芝口五丁目二郎左エ門と云者の悴良助時に十六

歳宝暦十二年四月十八日に霊夢を得て芝浜浪除杭の中にて

此尊像を得て創造立し重ねて當寺住持達和尚の開眼を

得安置せしより信心の者こゝに来り思ひ参り伏心の望にまかせ供養

佛に当寺へ寄せしむ

○妙覚山　等覚寺　一向宗　西末　下高田町
開山

○泉谷山大円寺　禅　牛込保善寺末　同所九丁目裏門月岬
開山　諦厳訛眉和尚　寺中門能院

○観佛山長安寺　浄土　知恩末　同所伊皿子車町横丁
開山　本誉上人還到旧門成阿大和尚

○醫王山福昌寺　天台　東叡寺末　同所長安寺となり
薬師堂　智証大師作
江戸伊皿子往古は讃岐守殿屋敷右品川御殿山に移り又此地に移
されり

○来迎山道往寺　浄土　智恩末　同所伊皿子台町
開山　法誉念無上人　観音堂　北所

○般舟山願生寺　同　同　高縄
開山　識蓮社識誉上人

○日照山光雲寺　同　同　同長応寺向
開山　自誉空厳和尚

○芳荷山長応寺　法花　本成寺末　下高田町
開山　日寮大僧都　鵜殿家城内に有来由
寺中
蓮長院　了運院　本照院　純正院　安禅坊
禅定坊　究詮坊　正泉坊　池本坊

三州西の郡より御当地へ引ル中古開基日翁上人日叫各所への
内にありしを当地へ移す
○萬松山泉岳寺　禅宗　大中寺末　高輪
開山門庵宗実和尚
往古麻布ニ有り正保年中此地ニ移る当寺ハ浅野家の菩提
所なり家臣大石氏をはしめ四十七人の義士の石塔有り
鎧なりてみだりに人を入られと江戸砂子に出たり
○帰命山如来寺大日院　天台　上野末　同所
大仏　開山木食但称の自作也寛永十二年建立
石仁王一丈六尺計石地ハ青石ニ毛彫の如く彫つけしあり
殊勝の石像也仁王地蔵共に但唱の作也此但唱ハ摂州多田の
産人と江戸砂子ニ出たり
○瀬暢山正覚寺　浄土　知恩院末　下高輪田町九丁目来成院ノ向フ
開山心誉上人
○旭耀山来成院常照寺　天台　上野末　上高輪
太子堂　十六歳御影御自作
稲荷社
庚申堂　青面金剛ハ民部卿作也
縁起云庚申青面金剛日本ニ無跡至テ人皇四十五代
文武天皇大宝元年辛丑正月庚申日始めて摂州四天王寺ニ

降臨しあれ其比天王寺の住侶民部卿僧都亮範感得の像を
自ら彫刻し勅命を以て一國一字の伽藍を建立し此像を
安置す是より最勝降臨の灵場ハ天王寺の南門前正善寺是
也然るに当寺に安置する多くの尊像ハ昔日僧都親感見し自ら
彫刻せし所の真像にして昔慶長年中に此所に安置すと云
当寺宝物　松化石　長一尺幅八寸程厚サ五寸計昔前橋
少将の亭へ天女持来りしを当寺へ奉納之よし甚珍の銘に

○寄附古来化石一物
江戸城外志波聖徳太子堂
万治元年戊戌十二月二十二日
前橋少将忠清

○元照山清涼院常光寺　浄土　増上寺末　上高輪
開山大誉上人
本尊善光寺如来の分身金像
寺傳云聖徳太子の感得ありし岡部六弥太開運尊宗の灵像
なり往古物部守屋か仏の逆臣を退治し難波の堀江の水面にて
尋湧現させ給ふ尊像を拝し班宮に拝みたる尊像の容を模
させられ冶工に命して鋳させしめ給ふを後元暦元年春一の谷合戦
にのぞみて武蔵国の住人岡部六弥太忠澄に守護頼し
年二月十一日の夜ニ向ひて渡し家ニ具し二月五日の暮方ニ摂州
芦屋の里ニ到りしかる芦屋ニ陣し兵糧をいるゝみ馬を休めける

主の八翁申けるハ某の先祖ハ由ある者にて保元平治の乱より治承に
及ぶ家侍にて皆失ひ候へども伝はる弁才天の尊像并
縁起の巻物斗り古へに預りし所に此度の合戦にも民家に移り焼かず
是こそ御 此御前の武者妻子を引つれ立退不思議の明暁は何
方へ参るべし 此尊像ハ公にゆかりある尊像に縁起を添へ
奉れと言ハ忠死 奇異の思ひをなし主翁に訊ねし鎧櫃に納めて
祈念せしに果して二月七日の軍に危難をのがれ薩摩守忠度を討
て武運を開き名を揚しかば代々子孫に持伝へしが今に至り
岡部氏より出家したる独社と云ふ禅僧由緒有て縁山の定月上人
へ寄附しを後上人は出世して常光寺へ転住し 是亦も旨を大僧
正の隠見に記し縁起に添へて下し賜りぬとなん
鎮守に安置す弁才天 縁起曰当寺鎮守に安置弁財天ハ藝州厳島
相模の江の島 江島并竹生島を勧請し奉るものなり元和元年の比
宗山大巻上人此地に移り給ひて尊像を感得して厳島弁天を勧
請し奉る其後当寺三世学冕上人に至りて新に本社拝殿を造
構せんとして其の基址を掘る事数尺一の石函を得たり是を開くに
白蛇二頭有り皆即ち尊形なるを感じて崇奉る大なる霊異なりし
有りたる其の尊像を感じて本施主となりて新に石函を造り白蛇を
納奉りのちに埋み納む石を以て壇を築くる上人に至り本社拝殿
を造営有し事を経て火災のため堂宇皆焼失す 此時まで奥之院

の妙霊異験を感ずる事ありし神社神宮又元の如く造立ありしとぞ
次ニ江の島弁財天ハ我寺有信の檀越常ニ渡海を帰依せらる
多年故を以一時江の嶋山巌窟ニ至り一七日所願せらるゝニ或時洪浪
来りて其身岩窟の内ニ浮流れ至心ニ此天を念し奉るニ幸ニ溺死を
免るゝ時ニ縄の如き物手ニまとへて拂ひ奉るニ又其の如し回視
ニあらて是を見るに甚惜木ニして荒蛇の環曲する如し是神物を
感ずる事を悦びて当寺ニ珍蔵して今江の島弁才天と勧請するもの是也
其比も木蛇をねまるニ全身白雪の如し鱗生出たり実ニ神霊なる
者也 後ニ竹生島弁才天ハ当寺一代の弟子何某弟として西国順礼の
時竹生島ニ詣けるニ悪風ニあひて竹生島ニ到りけるに得て飄泊
しも北越の湊ニ着きニ志願を遂さる事を歎き一心ニ弁天を念し
茫洋たる浪の中ニ忽ニ蛇浮動して来る驚きて是を見るニ盤踞せる
竹なり屈曲せる事三巾半其勢真ニ蛇の如し神霊此物ニ有る事
を信して珍蔵して帰り今の弁天ニ納む是ニ依て竹生島弁才天と
勧請する者也 嘻宇賀神ハ此天の属使 氣御者のあるもの也 故ニ生
身白蛇を現し或ハ木竹を假て其神霊を現ハし是則至信の致す
處不可思議のもの也

◎珠玉山清行院宝蔵寺 浄土 京知恩院末 高輪

開基慈誉大和尚 元天台宗 故有て今浄土宗と成る 開基より九
百余年中興開山 順誉清法和尚 当寺の開基より古跡として度々の兵

乱ニ依て今小宇となる
本尊宝珠阿弥陀　善導大師作　剣佛の後ニ善導大師の自筆ニ
永隆元年十一月十七日所刻する目ニ宝珠を持給ふ依て祈祷
の本尊也　故ニ華武將の時ハ其幕ニ此本尊を隔る也
子安観世音　本縁起　延喜帝震筆　西縁起ハ出候
光信筆　略縁起　和田義盛
略縁起ニ云　掃子安観世音ハ建久元年十一月頼朝公上洛の時とりや
いづくともなく霊女一人来て観世音を持来りて頼朝公ニ向ひて曰く是ハ
唐梁武帝いまだ世をつがせ玉ふ太子おハしまさぬを補陀落山ニ於
観世音ニ祈て祈願し玉ふニ不思議や此尊像を握上て得玉ふ程なく

太子誕生ましますを則昭明太子是なり夫より我朝ハ渡りて欽明
天皇の時本尊を作り玉ひて又人皇六十代醍醐天皇の信敬浅からず
震筆を染玉ひて此来由を記し玉ひ今将軍ニ授け奉りて
かの霊女ハ失如去まし帰雲の後子孫の加護を祈り給ふべしと
和田義盛縁起を作りし　今ニ当寺ニ有り
弁才天　宇賀神
人皇五十代淳和帝御宇慈覚大師江州竹生嶋ニ四国の時
波間より宇賀神顕れ竹生嶋ニ住むべしと告則慈覚大師
七寸三分ニ彫刻し竹生嶋へ納めし此当寺ニ安置せしは江
州竹生嶋本地仏ハ是也　日本巳待ハ此尊像より始る所也

釼鐙阿弥陀　漆義経守本尊　慈覚大師作
地蔵尊　性空上人感得の尊像
右宗派雑記
○高輪山安養寺　天台　南品川常行寺末　上高輪
開山
○　明法寺　同　同　同所
開基
○　海　寺　浄土　知恩末　下高輪
開山
○　山　法蓮寺

○　円福寺
○雨宝山黄梅院　禅　高古保安寺末　二本榎　上行寺東隣
開山　寂定播大和尚　観音宅
○海華山相福寺　浄土　西應寺末　同所
開山　法誉上人
○無榮山朗性寺　法花　池上末　錦氏　同所
開山　日清上人
塔頭　観理院　本寿院　玉泉院　円明院
○高野寺正覚院　輪番　紀州高野山宿寺　同所表門
本尊　弘法大師　四十二才御自作の尊影

寺中 功徳院　門主 宝性院　慈眼院　北室院

三鈷杉

高野丹生両大明神─境内ニ安置鎮守也

○長田寺

開山

○深縁山 永信寺　浄土　増上寺末　同所 但馬横丁 清林寺トナリ

開山

○金泉山 清林寺　同　知恩末　同所 覚真寺ウラトナリ

開山 光誉上人

○鏡智山 覚真寺　同　天徳寺末　同所─但馬横丁カド

開山

首尾弁才天社

縁起云此尊ハ弘法大師の作にして秘密修験の本尊之御面ハ玉女にして御身ハ白蛇なり三匝半に御身を巻て尾を御口に含ミ見る信する者に所願首尾備足なるしるしとて表示を以て其宝珠の内に加持─納め奉る也

○長谷山 義教寺　法華　池上末[illegible]　同所 但馬横丁入角

開山 日円聖人

塔頭 円寿院　顕乗院　真行院　了仙坊

○永寿山 國昌寺　臺町─細川中子つき

開山

開山
○護念山證誠寺　一向宗　西末　下高輪臺
開基
○高水山知時院
○泰竜山保安寺　禪　瑠璃光寺末　高輪臺町
開山　陽谷巖大和尚
○正源寺　一向宗　西末　二本榎
開基
○富士山上行寺　法花　大石寺末　同所
開山　日興上人

○正法山圓真寺　同　小湊末　同所　上行持ナリ
開山　可観院日延上人
○清涼山松光寺　浄土　知恩末　同所　黄梅院ナリ
開山　玄達專誉上人
○醫王山廣岳院　禪　常陸永巖寺末　同所
開山　禪梁和尚
當寺西ノ久保寄神山ニ有リ正保年中此地ニ移ス
○月秀山光基院　浄土　知恩末ノ　同所　横丁
開山
○松久寺　禪　青松寺末　三田　樹木谷

開山

厄除天満宮 社傳云仁和二年御歳四十二才正月十七日讃岐守ニ任ジ
テ下向ありし時同所勝法寺ニ十一面観世音一刀三礼シ
御自作也それ太宰府へ流遷し給ひ河内国七師里御叔母君覚寿
尼の所へ立よりたまひし時に此像をかたみとして進せらる文禄ニ此たびて
加陽泉山田氏の家ニおさめ人ありて其後具家の因縁ニ因て当寺に
安置したまふ本地ニ三尊観世音とあがめ奉る也

○樹谷山 徳明寺　一向宗 西末　二本榎　白金地続ヨリ 大和ヨリ丁ヘ 丹波ヨリ丁と云よ

開基

○常祐山 四徳寺　法華 中山末　三田 小山坂下村

開山 日壽上人

○廣布山大衆寺　日　同所 小山坂の上

開山 権少僧都 日達上人

○永昌山 竜原寺　浄土 増上寺末　寺三田小山

開山 岌蓮社寂誉上人

○天暁院　禅 大中寺末　同所 〃

開山

○法運山 長久寺　法華 身延末　同所 同断

開山 日浩大徳座

○無量院　天台 上野末　同所 〃断

開山

当所寺地にして住居せし所に渡辺仕の石碑有り

○綱生山当光寺　一向宗　西本　同所にあり

開基当光坊　寺中　教誉寺

当所は渡辺綱出生の地なり故に山号を綱生山と名付し

江戸村子にて有り

○延立寺　同　同　田町上丁

開基

○奥之院　二本松

十一面観世音　出浪千手観音

聖武帝の御時けんしゅんしゅんしんの弟子の仏師大和国長谷寺の十一面の像を刻し其余材を以て一寸八分の十一面観世音の小仏体を七体刻して所々に安置し其中の一体は即世に春日の作と称し上杉謙信坐守の中に収めて数々の合戦に利益を得られし数を知れず又千手観音は御長三尺にして旅僧来て此寺を譲り行く寺へ一寸八分の十一面観世音を此千手像の御腹籠となし此寺を出浪の観世音と号す之は昔近江国に定朝と云仏師信州善光寺に来たりしに折節善光寺焼失しけるが瓜の中是本の柱なり不思議に思ひ僧徒に問ふに此柱は出浪の柱とていまもありそ也当寺移りて本多善光建立の時此人寺道の材木を運びし老人の老翁大木を柱にと乞ひ来り此木を西の柱となれと翁を得て来

よし毎夜大光明を放つ善光善妙不思議に思ひなせし荒地をさく

見るに内に虫食ありし一首の哥あり

といふ此寺建立西の角柱を成して虫食の柱といへり其後三度の炎火に

掛り今もみなくのかゝ停りまた一山の僧徒是夢を感じ此虫喰の

柱の上下を切りし観世音二体を定朝に刻ましむ二体は善光寺へ納め

一躰定朝並びて法国に法縁ありめ此寺に安置此像を今公に拝し作記くに十一面

の像を胎内にも七尊信仰ありて其後旅僧に何もなく納めたり

謹代告しまするせ一寸八分の像を胎内となし月に崇敬所の霊仏也

○大平山大中寺　下野富田宿寺　寮三田

開山　吹菴和尚　曹洞宗　一実東僧派　三ヶ寺ノ内

○知福寺　浄土　知恩寺末　芝六丁目

開山

○成満寺　一向宗　東末　臺町

開山

○本禅寺　禅　祝言寺末　三田

開山

○瑞雲山龍翔院龍源寺　妙心寺末　同所

開山　水月観音　安置

○大仙寺　浄土　三田

弁山の大龍寺

弁山

三田

品川

南向茶話云古老の物語ニ元ハ下無川と書し子細ハ此所川海岸ニ
ちゝ川下直ニ海ニ入ゆへなりと可説たりの事也
江戸砂子続編ニ云武蔵国品川の歌ハ往古品革を染たる所也と
里人の云中の村ヲ川の名を品川と号せしといへりと記せり
訓閲集曰武蔵国大畠庄ニテ品革を製せし故ニ往古此辺を
大畠庄といふと見へたり
遠近紀行ニ云品川 望士峯 山崎無加
至大高雪飾珠世間無物耐形摸駿州此去数州外天際只看
富士円

訓閲集曰人皇五十一代平城天皇御宇自武蔵国大渡庄始進皮也
此革始白黄染革也

○稲荷社　北品川　神職五居　神主 小泉出雲守
牛頭天皇
名勝志ニ云　永享年中太田道真品川城内ニ勧請する所なり
洲崎大明神或ハ品川明神ともいふ　北品川の鎮守也　相殿稲荷貴
船の社　東海寺の鎮守なりと云

○貴船神社　南品川鎮守　神職五居　神主鈴木河内守
相殿　神明　牛頭天王
江戸砂子ニ云　貴船天王と称する者ハ六月七日祇園祭礼あるに依てなり

○御嶽社　南品川

○寄木神社　右二社とも鈴木河内守持なり

○八ッ山　又大日山　高輪より入口
砂子ニ云　むかし此所の出崎八ッ有しとぞ　又ハ八人の大名屋敷有しき
なりしが　むかしハ大日堂有りしとぞいふ
再校ニ　前校八ッ山と書しハ非也　昔より谷山也　谷山村なり　雉子
宮棟札にも谷山村とあり
谷々ヤツと訓して今も鎌倉辺にていふなり　ヤツと云て多ニしハいはれ
思ふに此辺小山有て間ニ谷々あるをヤツと山といひしにや　此所昔ハこ
宇の地勢とかはりたる所と見ゆれ　昔ハ在山あるハ今とも異なるべし

古跡之部

○御殿山　品川のうしろ東海寺の隣り

江戸城を云太田道真居住の地なり寛永の頃御将軍の御殿有りし

ゆへに御殿山と云ふ又同読に寛永十七年九月十四日品川御殿にて

毛利秀元に御好有りて御茶給りしよしを記す

此山の御殿は御上洛の時の御座所也とかや又むかし豊臣太閤

の人質を江戸へ進せられしも此所に御殿を建置れしとか

そのかみてんなるふみにしるし何やらの書にて見たりと有し

千万忘もの再按せらるべし

○鐘鋳の松　御殿山北手なり　増上寺の撞鐘を鋳たり

所が志るしに植たる松なり　江戸城より見ゆ

○行合の松　中の松の事　当世の鎮守の神輿祭礼の時此松

にて行合へありしとこれ付たるよし　江戸城より見ゆ

○霞之松　品川より池上へ行道の大通りの海道北の方に有

此松大木なりしも[illegible]にて枝葉なしと動く故に名付と

○鮫洲神社　鮫洲の海辺に有

江戸城より云昔此海辺に大なる鮫あがりて漁猟共是を報せ

ここにて[illegible]道疫病大に流行を捕人共に鮫の[illegible]

其鮫の頭を神にまつりて鮫頭明神といふ也よりて所の名を

いつの頃よりか鮫洲と云し東海道名所支に云　素[illegible]水川　少海なり

海巴近けきりし潮さしかゝる故にさゆみ川といふと云説有るなし
○梶原屋舗　鈴ヶ谷松平土州屋敷中なる又来福寺の土手なし
又来福寺と梶原松有り
○頼朝経塚　来福寺より六七町斗西に有り
右大将頼朝書写し経を埋めらまし所なり
頭念の佛君浄刹を垂るて遂に此納経なりといふ事なし是ハ
後世に右大将の追福して或ハ諸人よりし埋経せしものなるべし
○朝比奈屋敷　品川松平安藝守屋敷の中なる所
江戸砂の子　朝比奈三郎義秀の中屋敷跡なりといふ
梅ヶ木わ朝比奈三郎義秀に所々有り依て野州今川家の臣　朝比奈氏

の子孫今東武に多けれバ五人の跡なりとし殊に武勇の優れし人也
多ければ剱術の家も有るべし
○朝比奈の井　右邦ちの内に有り　広さ二尺計りまた浅き
井也丈余有り是を或一滴も有りと江戸砂子に有り
○太刀合の橋　砂子川にかゝる朝比奈剱術けいこの場所なり
と云朝比奈三郎江戸に住せし　ていまだ定らず所也是ハ朝比奈氏
の人の住せし所を昔の人の男でたヾ之し成すて殊に千代剱
術稽古ありと云ふすてなりけりあるなるべき也
○ゆるぎの末川　揺松を書し　動すれバゆるぎ石ありて
西玉の書に揺石とあり震松といつ雷の落て折れくだけし松

のみ也 其心大に違了

寺院

○万松山東海寺　禅宗　大徳寺派　寺領五百石　品川

開山宗彭沢菴和尚　賜号　天應大現國師　寛永十五年起之

開山和尚但州出石の生　三浦介平義明の末葉　秋庭綱典の子

也　師は大徳寺春屋国師也　後一凍紹滴和尚の弟子と成ル

正保二乙酉年十二月廿一日寂　春秋七十三　江戸於ク

開山廟所　大キ成石を生ましまはして三つ一の石　銘文もなく

只石あり是和尚の遺言なり

△万年石　庭前泉水の中にあり

△江葉　境内に多し

△景政塚　鎌倉権五郎景政墳所なり　春雨庵の内にあり　而是社

塚の上に松ありて今は折てなし

塔頭

瑞泉院　大林院　妙解院　玄性院　法雲院

正統院　真珠院　長松院　高源院　定恵院

琳光院　勝幢院　清光院　寿定院　白雲庵

慈雲庵　春雨庵

日暮政　江戸之郷しりとふ開(キカズ)　是を建立ありし鎌倉よりの引寺

ありしをさきをなしてきて来りしなる也

○福壽山清徳寺　禪　建長寺末　寺領十石　同所
開山物外佳竹和尚
○隣海山善福寺　時宗　藤沢清浄光寺末　北品川傳馬町
開山
○　法禪寺　浄土　増上寺末　同
開山言誉上人　寺中　眞樹院
○明鏡山養願寺　天台宗　常行寺末　同馬場丁
開山慈覺大師
○熊野山宗泰寺
開山

○　正徳寺　一向宗　善福寺末　同
開山
○瑠璃山光厳寺　禪　清徳寺末　同
開山中興空山徳公禪師
本尊藥師　太田道灌建之　道灌係所
○東光山本照寺　日蓮宗　池上末　同
開山東照院日順上人
○自覺山海徳寺　仝　南品川
開山
○照高山本覺寺　山王門流　同

開山　中興大阿闍梨是慶法印

○宝光山　本栄寺　日蓮　本光寺末　同

開山　日什大師

○実相山　蓮長寺　仝　池上末　同

開山

○恵日山　妙蓮寺　仝　京妙満寺末　同

開山　二位僧都日什大聖人　明徳三壬申年二月十八日入滅

○經王山　本光寺　仝　仝　同

開山　日什上人

○瑞聖山　大龍寺　禅　黄檗万福寺末　同

開山　香国和尚　塔中　正覚院　心花院

○瑞聖山　天龍寺　仝　駿州大正寺末　同

開山　一庭永見大和尚

○海広山　海蔵寺　時宗　藤沢末　仝

開山　遊行二代目真教上人

○既成山　新行寺　光明院　浄土　増上寺末　仝

開山　観誉希宗上人

当寺ハ駿巳新行寺ト元一寺也

寺中　題松院　正受院

○心海寺　一向宗　東末　仝

開山

○熊野山常行三昧寺　山王門跡　上野末　同
開山　慈覚大師
○了信寺　律　長門功山寺末　北品川
○鳳凰山天妙国寺　日蓮宗京妙満寺末觸頭寺領二十石　南品川
開山　天目上人　仁ニ開山　日秦　日照　山門二王ハ運慶作
往古慶長御鷹狩之時当寺へ入らせられしゆへ守護不入とも
紅葉山より当寺へ納させ玉ふよしも其故今にいたる
○海照山品川寺　普門院　真言　京三宝院派　同所
開山　権大僧都　弘尊法印　嘉應元年草創

氷月観音　江戸名所に云本尊は弘法大師の持佛にて[illegible]の聖観音海中出現の像也大師回國の時武州荏原郡の押領使品川氏に附せらるそれより傳へて品川左京亮といふものまで傳へける應永年中鎌倉持氏公上杉禪秀と戦ひの時品川一族討死せし此時本尊を安置しおかれたり太田左衛門大夫持資入品川を領し持資深く此像を信し一宇を建立して安置せし鎌倉に訴へし道灌上杉定政の為に打たれ其後上杉不和に成り其後大に乱れて諸社諸寺破滅におよふ永禄十二年小田原の北条甲州の武田と戦ふ時武田武州の北方にかゝり江戸品川まで追捕し品川大円寺の此本尊をもちさりぬ(?)

佛菩薩ニ坂掃ふ住僧法印悉く害せり其時此本尊武田家ニ
ぬすミ手前大熱狂乱して云我は武州品川大円寺の本尊也速ニ元の地
ニ返し下さるへき敵国ニあるへきにあらすと所ニ武田の家臣
甲州ニ来りこの事を聞 のちをふくろ之本尊ニ返りむすの山の
礎の上ニてらんを作りて安置し乃て能芝ニ非人のきみてうちて在り
を葉庭元年五月中比法印猶大僧都弘覚寺を修理
りしと当寺の利生は名月の水底ニ蔵て影をやらさること
よしと水月観音と号す
与地氏 一番 汐つ 正元元年建立
○泰敬山 長徳寺 時宗 藤沢末 寺領十石 南品川

○龍吟山 海雲寺 禪 海晏寺末 同
開山 分外和尚
○補陀落山 海晏寺 同 三田功運寺末 砂水
鮫頭観音 大鮫の腹の内より出たる尺佛なり 江戸砂子ニ
江戸砂子ニ当寺ハ紅葉の名所也 本堂の後の山一面ニ紅葉
の大木あり 秋の末 見事錦なせり
開基平時頼 墳 寺中ニ有り
蓬莱稲荷 開山の德を慕ひて三浦より附来るよし
ゆへに錦とてあり
釈瘡石 いなりの宝物

○泊船寺

さめ州

鈴ヶ森

神社略記云く俗傳に云当所品川と鈴石と云名石有り
其石長く丸き石也此石の内に鈴の音有り故に此所を鈴が
森と号すとなり

○磐井神社　一名 鈴森八幡　別当 八幡山密藏院　神主 森田舍人

武蔵野地名考云磐井神社荏原郡不入斗村に有人
今は鈴の森八幡と称し 或古記に曰荏原郡磐井神社圭田三
十二束三字田敏達天皇二年癸巳八月所祭大己貴神也社巴
有磐井祈事土俗有妄願則御手洗井水変塩味事正
直則如清水近國奇之祈願病者取之服之其功験如神

土俗曰薬水

神社略記云当社山州男山同社天正年中鈴守ノ池ハ江戸砂子

此説を用ゆい信しがたし

明暦四年山崎闇斎江戸下向の道の記遠近紀行ニ云鈴森

社此社旧有一石轉之則其声如鈴近人備去云ゝ

誰子盗鈴石定其掩耳行人聞雖不識争奈鬼神

情

此鈴石盗されたる事ハ無しかりけり

三代実録ニ曰貞観元年正月廿七日己丑武蔵国従五位下盤

井神預列於官位

鈴石 当社ニ有り大サ二尺許りにして色青赤く他の石を以て

是をうてハモ音鈴し略して江戸砂子ニ有り

遠近紀行日此社旧有一石轉之則其声如鈴近ロ人備去ト云

戸田氏鎌倉紀行云鈴森昊塲致恭瞻拝意忽々森欝

孤林狸神威鈴韻風

○荒藺崎 鈴ヶ森の磯なり

万葉集ニあらゐの磯武蔵とあり

万葉十二
くさかけのあらゐの崎のかさしまを見つゝや君か山路こゆらん　よみ人しらす

夫木十七
おきつ浪あらゐの崎の浜風にうらよせ来てなくなる千鳥　寺出川院　兵衛

八　水三
秋の夜のあらゐの崎のかたしきに清き月をぞ見つけたる　民部卿為家

○大井　江戸より二里半　村高千六百石余の大村也
江戸海道にて此里に一向宗の西福寺といへる寺あり境内に大きなる
井あり其ほとりにくしてみるに目なるめきいつの代よりある
事たしられ此井を以て村の名となれり

○諏訪社　来福寺持

○神明社　同

○稲荷社　同

○荒神社　同

○赤鑑権現社　同

○来福寺　真言　長遠寺末

開山

梶原松　境内にあり往古梶原か塚跡当寺之といへり

○光福寺　一向宗　東本願寺末　同所

○西光寺　同　西　末　同所

大井櫻　本堂の前にあり数枝六七百程左右へおほひて其類
あまた名木なりしか老木となり今は枝少なくなりしと江戸海道にあり

○泊船寺　禅　種徳寺末　同所

稲荷社

○清傳寺　品川天龍寺末　同所

○嶺雲寺　同　末　同所

○常林寺　天台　品川常行寺末　同断

○不入斗村　大井の辺　此村名一ヶ国ニ一ト村づゝあるよし

○長栄山本門寺　直本寺　寺領百石　千束郷池上　江府三里

開山日蓮聖人　開基日朗上人

人皇九十代後宇多院弘安年中起立　祖師入寂荼毘の地也

歯骨ハ身延山ニ納まる

本堂祖師御影ハ日法上人の作　祖師在世の時前ニて

刻む所也

当山什物

注法華経　祖師直筆の自注　弟子檀那への遺物　自

筆帳、身延山弟子中輪番持自筆の帳

自筆の消息数多　上人所持の数珠

肉付の歯　上人在世の時の歯也　紫色の石　霊鷲山ヨリ将し

鳥字の太刀　おの　当山の什物なり

山門　仁王尊　行基作

往古ハ古川薬師ニ有り中奥古川薬師の別当痴病を当寺の

日蓮ニ祈りしニ快気せしかハ此仁王当寺へ納しと云

祖師堂　長栄山　本門寺　此三つの額本阿弥光悦筆

当山の地ハ実東番匠の棟梁宇右エ門尉宗仲といふものゝ住所

の地なり　元祖上人ハ房州小湊の産にして　誕生寺ハ出生の地也

房州より鎌倉に至り比品川に着船有して此地の宗仲の家に
入らせ玉ふ宗仲甚だ尊敬す其時祖師此地を見玉ひて我遷化も
この地なるへしと後身延より下山して当山にうつり玉ふ宗仲も弟子
となり家を捨して寺となせり今の大坊是也当山に古跡の両
院あり

大坊　祖師入寂の地　宗仲か住所の地也日澄上人の寺となれ

南坊　日昭上人の寺　照栄院　日朗上人の寺

覚蔵坊　日像上人の寺　是も日朗上人の弟子也　此坊江戸御子

相伝して弘安五年九月八日身延を下山して同十八日当山に移り
玉ふ同廿五日弟子檀那等を集め安国論を講談し玉ふ十月
十三日当山に於て遷化し玉ふ今大坊の地是なり

一説に地黄坊樽次と酒を呑し池上太郎左エ門か先祖則此山の主
なり代々池上を以て氏とすと然れは左エ門宗仲は是則太郎左エ
門か祖成るへし

内裏雛 一云　後宇多院御宇弘安五年壬午十月十三日武蔵国
荏原郡池上太郎左エ門宗仲か宅にして遷化行年六十一歳也
今ノ池上は宗仲か宅の跡也

寺中

照栄院　覚蔵院　九条院　妙泉院　中道院

本覚院　玉蔵院　安立院　善覚院　妙法院

真麻院　大善坊　正教坊　妙遠坊　本成坊

岩本坊　蓮光坊　妙寿坊　遠来坊　妙恵坊
円頓坊　大林寺　善源寺　林昌寺　本随寺
妙安寺　栄林寺　妙浄寺　本住寺　長照寺
妙光寺　正教寺　本光寺　本覚寺　長慶寺
浄心寺

○千束池　同所にあり長三町よこ五十間ほとの池也
里諺云昔此池に大蛇ありし是を七面と祭るよし池を限りて
余を池上おとこいひ池尻おとこいふよし

○日蓮腰掛松　千束池の汀にあり

○池上神社

東京雑記云神名帳云賀茂郡今本青坂稲実池上
神社称する池上本門寺境内にある七面の社是也
往古の池上神社なるへし

追加

○新田大明神社　荏原郡矢口

新田義興霊社也その後ニ廟所ありて木立茂りたる所也
延享三年春三月寺山庚碑銘を建　服元喬撰　鳥石書セ
其碑銘を以て考ふるに義興ハ左中将義貞の庶子延文中宗稱か
武州に住て当山国清入道道誉幕中の士竹沢右京亮良衛す
以て義興に事へ志を又江戸遠江守某寛姪下野守能登をして
計らしむ十月十日義興武蔵上野常陸下総の士ニ将として
武州ヲ發し矢口津ニ至従者十三人ハ竹沢舟人と謀り舟ニ穴穿し
て舟を沈む江戸の兵五百余竹沢兵百五十津口ニ伏せ義興遂
ニ此所ニ而横死ス其後江戸氏国に帰らんとして十月廿三日渡ニ到り向ふ
舟人渡之中流ニして雷電晦冥し舟覆て死す江戸氏大ニ懼れ
国ニ帰り七日ニして血を吐て卒す津民懼て廟を立て其神を
追祀して今ニ至て四百余年ありとぞ
其世当山家より造営ありて社頭巍々として祭神威霊いちじるしく参
詣の貴賤群たる也

○十寄社　矢口より五町程六郷の方

相伝ふ云新田義興矢口船中ニて横死の時随仕して死びし十人
の臣を祭りし所謂世良田右馬介　井彈正忠　大島周防守
土井三郎左エ門　市川五郎　由良兵助　同しく新左エ門　南瀬

六郎ニあり　其名太平記ニ見ゆ

○日本武尊神社　同所

求涼雑記云十寄社の後の方ニ有り大鳥明神を移し奉り

のよし　古老物語りしぬ

○雷止観音　同所　真福寺

里談云江戸竹沢矢口ニ至りし時迅雷疾風殊の外なりしが

所の者大ニ怖れて近所の観音寺ニ参りて護摩を焼き念仏を

申奉りし雷静りけり仍此観音を雷止の観音と云ゝ今ニ

有りと故ニ義興の本地を観世音とも云ふよし

○光明寺　浄土　鎌倉光明寺　鵜ノ木村　矢口ノワキ

当寺より五香湯出るよし　江戸遠江守竹沢右京亮墓当

寺ニ有り此法会ありとて毎年十月十夜講有り

○古川薬師　六郷領古川村　別当　安養寺

略縁起云人皇四十三代元明天皇和銅二年春行基菩薩関

東下向の時此処ニ古河何某と云者子なきを悲しみ此ところを佛

ニ祈る処一子を設くし乳の出ざるをなげきし行基此処ニ立より給ひ

此由を申せしに行基佛の告を得られ教て云汝が居宅の戌亥ニ銀

杏の異木有り其木の根ニ洞ありて清水出づ是を汲して呑ませば

乳味ゆたかに成んと教へ其の世古木を切て見るに果して異水有り

急ぎ産婦に呑ましむるに忽乳出けり然るに切たる古木抱へ

光りけり諸人怪しみ行基へ告けゝれは我に尊て此木をもて三尊の
佛像を作るへしと瑞夢を蒙りたりとて薬師弥陀釈迦一刀
三礼に彫刻なして精舎を建立し東光坊と号す
和銅三庚戌年成就す 其後聖武帝后皇子誕生の時御乳
出されは行基を招て乳味の加持を乞玉ふ時 武州古川村薬師へ
銀杏を附寄附有らは乳を得玉ふて奉祈乳則出けれは
銀杏を中堂の左右に植へ諸堂を御建立其号王山世尊院
安養寺と三号を下し玉ふ 今の銀杏は其時の木也 今も年々冬を生し
月中王加持会を修行スト云々
武蔵野地名考に云 荏原郡六郷領古河村と云所に寺院二ヶ所

池上本門寺の南にあたり老母か墓古へ薬師の池といひて今此所よ
あり〳〵 敍順和名鈔に荏原郡の内蒲田本郷あり 今は
是をすゝめて六郷といひ了成りし 或書記に云 荏原郡薬師
池貢鯉鮒 亦旱水不増減傳言彼小角入定之府之池也と云々
○大師河原　川崎入口左ノ方一里
東海道記に云 弘法大師天竺へ渡り自ら像を造り流砂川へ
流し給ふに此浦に流れ寄りを漁者引上てより大師河原と
云 木像に牡蠣付て今に有とぞ
元亨釈書云 釈空海世姓佐伯氏 讃州多度郡人 父田公
母阿刀氏 夢梵僧入懐而有身 在胎十二月 宝亀五年

生ト六こ